

---

# 風都紅塵戦奇譚      二．風塵の都

秀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風都紅塵戦奇譚      二・風塵の都

### 【Nコード】

N0684E

### 【作者名】

秀

### 【あらすじ】

例年になく異常気象の続く吐蕃<sup>トゥバン</sup>皇国。そんな中、やはり異常な長雨に見舞われている沙漠の外縁の村・黄瀬<sup>キセ</sup>に辿り着いた嵐。そこで出会った樵<sup>ハク</sup>の少年、百。彼の母親の病気の原因を調べている内に、辿り着いた山上の屋敷。閉ざされた屋敷に隠された秘密とは？・・・  
・・・オリジナルファンタジー小説。歴史好き、古代史好き、神話好き、オカルト・ミステリー好きの作者による、色んな要素の詰め込まれまくった話です。

## 1・吐蕃<sup>トウバン</sup>皇<sup>オウ</sup>国

このごろ都で流行るもの。

西域風の歌曲。

西域風の装いの女。

西域産の香。

そして西域の神の信仰。

若い者は目新しい文化に興味津々。

眉を顰める年寄りの視線も気にしない。

都の中心地では西方産の香を纏った西方風の美女がもてはや

され、

男どもの視線を集める。

そんな都で今一番の話題の主。

それは皇<sup>オウ</sup>の一番の寵妃。

黄金<sup>キン</sup>色を身に纏う絶世の美姫。

その名を火晶<sup>カシヨウ</sup>という。

## 1・吐蕃<sup>トウバン</sup>皇<sup>オウ</sup>国

現在、大陸上は大きく2つの国が権勢を誇っている。西の大国と呼ばれるのがバルジャ王国。そして東の大国と呼ばれるのが吐蕃<sup>トウバン</sup>皇<sup>オウ</sup>国である。そしてこの二つの大国は東西に伸びる交易路によって結ばれていた。

交易路には大きく3つある。北から「草原の道」、「砂漠の道」、そして「海の道」と呼ばれているもので、そこには常に種々様々な人や物資、そして何よりも情報が行き交っていた。

東の大国吐蕃は非常に広大な勢力を誇る国であった。東と南は海

に面し、西は沙漠と峻険な山脈、北は草原と起伏の激しい山地に接していた。国土は2本の大河とそれらから分岐した支流によって潤され、更に網の目のように張り巡らされた運河が国内主要土地を繋いでいた。おかげで国土は肥沃で、特に東と南の地域は屈指の穀倉地帯として名高く、また水産物の漁獲高も近隣諸国と比較しても群を抜いていた。また北部地域では畜産が、西部では果樹栽培や金工業が盛んであった。

吐蕃皇国は、しかし単一の民族や勢力の占める国ではなく、複数の民族や勢力がそれぞれ国という行政単位を担い、それを中央でまとめ一つの「国」という姿を形作る、多民族集合国家であった。それは国としては一見不安定な組織であったが、吐蕃のように領土が広範に渡る国にとっては、最も画期的でかつ効率の良い統治システムなのである。

国土の中央に位置するのが、首都「大都」<sup>ダイト</sup>が置かれ、吐蕃皇の治める「吐蕃王国」である。内陸に位置しており、高度に発達した水運と陸運の便によって国土各地から物資や情報の集まる、文字通り吐蕃皇国の中心地である。耕作地は少ないが、集中する物資による工業の盛んな地である。また人種は大陸中から集まっているため多民族的で混血も多いが、中心をなすのは国の名前ともなった吐蕃人である。

行政単位としてその次に来るのが「公国」であり、吐蕃には3つの公国があった。公国は吐蕃王によって「公」の称号を与えられた者によって治められており、吐蕃では唯一自治が認められていた。また同時に各公は吐蕃皇国の重臣であり、皇の補佐役<sup>オウ</sup>でもあった。そして各公は年に数回大都に集まって国家の大事を決したり祭礼を行なったりする役割を担っていた。

皇国の中で最も有名なのが西の沙南公国<sup>シャナン</sup>である。沙南は交易路の一つである「砂漠の道」の東側の終点に当っており、豊富な物資や情報、人種の入り乱れる、吐蕃屈指の富裕な国なのであった。現在の公は姓を珪<sup>ケイ</sup>、名を潤<sup>ジュン</sup>という、30代前半の皇国最年少の人物であった。最近父親から公の位を譲られたばかりであったが、その内政能力はまずまずのもので、内外から一目置かれつつある人物である。沙南の経済は西との交易と地形を活かした果樹栽培、更に豊富な地下鉱物の発掘・利用によって潤っていた。また国内の治安も繁華な都にしては良いもので、実質吐蕃で二、三位を争う国力を有した国である。言うまでもなく一位は吐蕃王国である。

公国の次は「県」「邑<sup>ユウ</sup>」と続く。その他にも「ムラ」などと呼ばれるたり単に「集落」と呼ばれたりする集団生活単位が構成されたりもするが、皇国において統治権が認められているのは「邑」までである。しかし「県」以降は自治権は与えられていない。各集団単位ごとに代表者がおり、形式としてその人物がその集団を統治していたが、その統治メンバーには皇国から派遣された官僚が充てられることが義務となっていた。皇国から派遣された官僚はそのまま皇国の意思を反映するもので、その発言には絶大な力があつた。つまり間接的に「県」「邑」は皇国に統治されているのである。

これら「公国」「県」「邑」という小さな国の集合体が「皇国」なのである。

基本的にこのような方法で吐蕃皇国は国を統治していた。

これ以外に特筆すべき勢力は、定住地を持たない移動民族である。それは北の草原地帯や南東の海岸地域に多く、その生業によって遊牧民族と呼ばれたり海洋民族と呼ばれたりするが、その中で最も有名なのが「砂漠の民」と呼ばれる一団である。

砂漠の民はその名の通り沙漠地帯に勢力を有していて、基本的にその地域で生活している。

遊牧民族や海洋民族との一番の相違点は、特定の生業を持たない集団であるということである。彼らは行商で生計を立てる者、傭兵として身を立てる者、旅芸人として諸国を巡る者と、それぞれの能力に応じてそれぞれがそれぞれの場所で生活をしていた。そんな一見ばらばらな集団であったが、その実彼ら相互の仲間意識は非常に堅固でまた誇り高く、各自が砂漠の民の一員であるということにこの上ないプライドを持っていた。

砂漠の民は多民族の集団である。元々沙漠地帯は吐蕃や周辺国の勢力範囲に含まれてはいるがその地形や気候の苛酷さのためにどの国の積極的な支配も受けない地で、いわゆる無法地帯フロンティアであった。その地へ様々な事情を抱えた人間が集まって集団を形作つたのが、「砂漠の民」の始まりである。そんな元々ばらばらの人間の集まりである砂漠の民の団結力の元であり、彼らの精神的支柱となるのが族長とそのブレーン集団であり、特に「族長」と「姫」と呼ばれる人物には特別な尊崇が寄せられていた。

砂漠の民は常に移動を繰り返しており、またそのメンバーの入れ替えも増減も激しい。また沙漠地帯というどの国も手を出しにくい場所にその勢力の中心があるため、彼らの正確な勢力やメンバーは、彼ら自身以外には誰にも把握することが不可能であった。また族長や姫などの主要メンバーの存在は、内外に知られてはいてもその詳細はまったく不明であった。そしてそのような謎の多い点が更に彼らの名を高め、吐蕃や周辺各国の人間にとって「砂漠の民」を一種畏敬の対象として捕えさせ、様々な意味で一目置かせる要因となっているのであった。

吐蕃王国の首都は同時に吐蕃皇国の首都でもある。そして現在の都は「大都」といった。

大都は巨大な都である。住民は50万を数え、町の面積も皇国内最大を誇る。否、そうなる予定である。予定、というのは、現在「大都」は建設中であるからである。

吐蕃の皇位が替わったのは3年前。その翌年、皇は遷都を発表し、都をそれまでの都・江州コウシュウよりも北に遷した。それが現在の「大都」である。

南北を大河に挟まれた温暖湿潤な穀倉地帯、通称中原チュウゲンのまさに中心に位置していた江州に比べ、大都は北の大河沿いの、やや寒冷で乾燥地帯に接する町であった。また中原に属してはいたが、川向こう見晴るかす場所には既に乾燥した赤土の大地が迫っている、いわば穀倉地帯の北限といってもよい場所であった。実際大都は、江州が都であった時代には人口数千の一商業都市にすぎず、さほど開発の手も入っていなかった。

しかし一方、手付かずの広大な土地のある場所でもあった。また、大河沿いであるために海との交通の利便も良く、北の通商路である草原の道とも一線で繋がっており、大陸貿易の面から見れば、便利な場所に位置してもいた。また国内交通は、先皇の統治時代に完成した運河のお陰でまったく不自由はなかった。

つまり、暖かく過ごしやすいが、3つの交易路のどれからも離れている江州と比べて、大都は経済の面から言えば有利な土地柄であったのである。現皇はそこに目をつけ、江州を副都とし、大都に都の中心を遷したのだといわれている。

「大都」の建設のため、皇国内から様々なものが召集された。「公」「県」「邑」にはそれぞれ工事の人手や建築資材、また資金やその他様々な資材の徴収が割り当てられた。

工事は昼夜を徹して行なわれ、現在ではほぼ「大都」は皇国の都としての体面を保つに相応しい姿を整えていた。都の機能も住民の

移住もおおよそ完了しつつあり、大都には活気が溢れていた。今やほんの数年前の北の小都市・大都の面影は既になく、様々な人種や珍しい外国の産品、言語、情報等々の行き交う、吐蕃一の大商業都市・大都へと変貌していた。

大都の町は長大な城壁に囲まれた、いわゆる都市国家であった。白い城壁は堅固でありながら優美さを兼ね備えており、何ヶ所か設けられた門は丹塗りの太い柱と黒塗りの巨大な木扉で、見る者を圧倒した。

町は南門から北に真直ぐ太い主要道路が走り、それを中心に碁盤目状に街路が配置されていた。そして町の中央を貫く道は真直ぐ、町の一番北にある王宮の正門に繋がっていた。他の道はただ踏み固められた土で、良くて砂利が敷き詰められているものであったが、この道だけは磨き上げられた黒曜石で舗装されていた。一点の隙無く黒く繋がる道は白けた土色によく映えて美しく、誰ともなくこの道を「夜光の道」と呼んだ。月明かりの美しい夜に輝く道、という意味である。

この道の両側には商店が軒を連ね、様々な商品の売買が活発に行なわれていた。南門に近い辺りは固定の店舗はなく、天幕を張った行商人たちのエリアとなっていた。そこから数ブロック先が、大都に居を構えた商人たちの店舗が集められたエリアであった。

更に商業区から水路一つを隔てた先は行政区となっており、各役所が一ブロックずつに配置されていた。水路に架けられた橋は黒の橋板、丹塗りの橋脚に金の擬宝珠ぎぼうしゅが配された、同じく丹塗りの高欄といった、重厚でありながらも華やかなもので、都の美しさに花を添えていた。

そして行政区の先、「夜光の道」の突き当たりにそびえる巨大な建物が、吐蕃皇の住まいであり、皇国政治の中心である、正に吐蕃皇国の中心部、「円城」エンジョウであった。

「円城」は町を囲む城壁と同じく白壁で囲まれ、丹塗りの柱と黒



の木扉の巨大な門を正門としていた。敷地内は、黒い道の周囲に今度は白の砂利が敷き詰められ、所々に木や花が配置されていた。そしてその中央にある朱の柱と白壁造りの壮麗な建物が、王宮であった。

更に「夜光の道」は王宮の裏門を貫き、大都の北地区を貫いて北の大河、明江ミンコウにまで至る。

そして明江の対岸、なだらかな赤土の台地では、大都の建設と同時進行でいま一つ大規模な工事が行なわれていた。こちらは大都の建設の開始に遅れること一年から着手されたもので、いまだ全貌は明らかになつてはいないが、どうやら巨大な建物であるらしかった。この建物は河の南にそびえる「円城」のちょうど対称の場所に位置しており、やはり皇国内の各所から労働力や資材を集めて工事が行なわれていた。

以上が現在の大都の状況である。

吐蕃皇国政府の一日は、朝一番の皇臨席の会議、「朝議」から始まる。

「朝議」とは円城の「謁見の間」に皇以下文武両官、官位を持つ者全てが集まり、前日の報告や本日の政務予定発表、陳情や幾つかの討議を行なうというものである。つまり、一日の始まりのセレモニーであると同時に、一日の政務を潤滑に行なうためのスケジュール確認の時間なのである。

その日も朝議は予定通りの時間に始められ、部屋の前方、数段の階きざはしの上で玉座に着いた皇によってその日のスケジュールが一通り述べられ、その左右についた文武両官の長から幾つかの補足と指示が下された。

「大都」各所の工事に関する連絡事項、来年採用の官僚及び皇立研究所職員・研究員採用試験の出願開始の公布、大都への新規居住

申請者報告、等々。

「北の宮殿の工事が遅れておるようだな」

皇の指摘を受けて工事部門の責任者である官僚が深く頭を垂れた。「も、申し訳ありません。現在、能<sup>あた</sup>う限り迅速に工事を進めておりますが、いかんせん人足の不足と地盤の問題がありまして、思うようにははかどらず…」

恐縮しきつた返答に、皇がわずかに眉を顰める。

「工事の人数が足らぬのか。ならば増員するがよい。現在の担当はどこだ」

「いえ、人数は…いえ、もちろん増員も必要ですが、むしろ一番の問題は土地の方でございます。かの計画通りに進めますには地盤が軟弱でありまして、土台すら充分には支えられぬのでございます。そのために何度も土台の工事をやり直しているような状況でありますして…」

「恐れながら陛下、計画の変更をされた方がよろしいのではないかと。場所をすこしずらせば、当初の計画通りの建物を造ることが可能となると思うのですが…」

その言葉に皇が眉を跳ね上げた。

「ならぬ！場所の変更は認められぬ。北の宮殿は必ずあの場所でないくてはならぬのじゃ！」

予想を越える皇の言葉の激しさに、工事関係者のみならず議場に集う全員が思わず身を竦めた。皇の視線の鋭さは全員の気を呑むものがあつた。

「……なれど、陛下、今のままでは…」

皇の傍らに控えた武官の高官が沈黙を破った。

「如何でしょう、陛下。今一度土地を測定し直すのです。その上で計画を修正するのです」

「さすれば場所を変えずとも計画を進める方法が見付かるやも知れませぬ」

それを受けて宰相らが続けた。その言葉に皇はやや表情を緩めた。  
「…よかるう。仔細は任せる。明日の朝議までには何らかの報告を持ってこい」

「は、承知いたしました」

皇の言葉に工事責任者の官僚が深く深く頭を下げた。その長い袖の陰に隠れた横顔は、やや血の気が引いていた。

朝議が開けると、官僚たちはそれぞれの仕事場へと散ってゆく。皇も幾つかの決裁書類を書記に持たせると、先に執務室へ向かわせた。そして皇自身は数人の侍従を従え、王宮の北側の後宮へと足を向けた。

後宮に入ることのできる男性は、基本的に皇のみである。そこで侍従は後宮の入り口で待たされることになる。そしてそこからは後宮付きの女官が従うことになるのである。

後宮には何人も側室の居室があるが、皇が向かったのはその中でも最も高い場所にあり、最も明るい日差しが差し込む場所であり、最も暖かく、そして眺めの良い場所に設けられた部屋であった。

部屋の入り口に着くと、女官が静かに扉を開いた。そこから皇が内部へと声をかける。

「火晶。起きておるか、火晶、黄金の美人、佳き香りの姫よ」

その声には、朝議のときに文武官僚らの背筋をさむからしめた迫力は微塵も無く、ただ甘く蕩けそうな表情に似合った情感のこもった声音が、柔らかな薄金の紗の帳の中に響いた。

するとその声に応じるように室内の空気が揺れた。甘い桂花に似た香りがふわりと床の上から立ち上る。

「ようこそいらつしやいました、陛下。そろそろいらつしやる頃と思い、お待ち申し上げておりました」

半透明の紗がふわりと引き上げられ、その奥で一人の女が頭を垂れて皇を迎えた。

「面を上げよ、火晶」

皇の許しの言葉を得て、女がゆつくりと顔を上げた。そして面前まで近付いていた皇を見上げ、ふわりと微笑んだ。

「おはようございます、陛下。今朝も御機嫌麗しゅう。」

「そなたの顔を見ることができたなら余はいかなる時でもいかなることもあるうともこの上なく幸せを得ることができるのだ。そなたの美しさはまこと余の宝。そなたの存在は余の全てなのだ」

言って、皇は女の髪の一房を掬い上げ、口吻けた。それは上質の亜麻糸の色をして皇の目を喜ばせ、上質の絹の感触で皇を悦ばせた。

光を孕む亜麻色の髪、白磁の如く透き通る柔肌、常に夢見るような光を湛えた鳶色の瞳。その姿と常に纏う金色の花の香りから、「黄金の姫」との称号を得ている、西域諸族昌氏<sup>シヨウ</sup>出身の女。皇の一番の寵姫にして現在、皇都・大都で最も有名で憧憬の的存在。それが火晶。彼女の名前である。

## 2・黄瀬

吐蕃暦331年、その年は近年まれな異常気象に見舞われていた。例えば吐蕃東南地域は緩やかな雨季と乾季のサイクルがあつて、雨季に水を蓄え、その豊富な水によつて乾季の灌漑を行なう。それによつて、一年中耕作を行なうことが可能となつていた。しかし今年は、例年ならば既に雨季に入っているはずなのに、数えるほどしか雨が降っていない。現在は地下水や川などの水がまだ豊富にあるので特に問題はない。しかしこのまま雨が降らないままとなると、乾季の耕作にはかなりの影響を及ぼすことは明らかなことであつた。雨の降らないことに悩んでいる地域があれば、一方、吐蕃西方地域はこの時期、ひどい雨に悩まされていた。

西方地域は一概には言えないものの、やや乾燥した土地柄であつた。西南地域は高い山脈に接しているため、山より流れ落ちる豊富な川水によつて西方地域では一番潤っている土地であつたが、それでも農耕が生産の主流になるほどではなかつた。

その西方地域がここ一ヶ月ほど長雨に悩まされていた。川は普段の二、三倍にも増水し、普段水に浸かるようなことのない耕地にも水が浸入し、作物の根腐れが起こり始めている。

そののみならず川に架けられた橋のいくつかが流され、交通にも支障をきたし始めるなど、異例の長雨による被害は拡大を始めていた。

「……よう降る雨だのう……」

簡易宿舎の窓から外を眺めながら嵐は盛大にため息を吐いた。

黄瀬<sup>キセ</sup>の街は沙漠の外縁の街の一つで、沙漠の南東端にあつた。沙漠の街の一つとはいえ、この辺りまで来ると土地も気候もほとんど

厳しさはない。何といっても山脈から流れ落ちる川のおかげで農耕も行なうことができる。もちろん耕地は広くはないが、沙漠の荒涼とした景色を見てきた旅人にとっては、やっと沙漠の旅が終わる、という安堵感を覚える光景なのである。

この街からは道が四方に続いている。北へ続く道は山地を越えて吐蕃王国へと真直ぐ繋がる道。南は山脈を越えて商業都市カジャルへと通じる。西は言うまでもなく沙漠への道であり、東へ溪谷一つ越えれば吐蕃皇国最大の公国、沙南公国がすぐ目の前になる。いわば黄瀬は沙漠東端の交通の要衝なのであった。

この街に嵐が辿り着いたのは5日程前。ここまで一人、徒歩の旅を続けてきた嵐は当然この街に長居するつもりなどなかった。旅の荷物 食料や水など を補給したら、すぐにでも旅を再開するつもりであった。

しかし嵐は既に5日、この街の簡易宿舎に足止めされている。理由は簡単。街の側を流れる川が折からの長雨で増水し、橋は流され、道も至るところ削られたり土砂の崩落や落石被害に遭い、とてもではないが安全に旅に出ることができないからである。

「ほんに、参りましたなあ、この雨には」

宿の女将がのんびりした口調で頷きながら、嵐にカップを差し出した。

「この辺はこんなに雨の降る土地ではないだろう？」

カップを受け取りながら嵐が訊ねる。

「もちろんですよ。そりゃあ今時期はどっちかといえば雨期ですがねえ、こんなに毎日、一日中、降るなんてこたありません。夕方頃さーっと降って後はからり、そんなもんですよ」

「そうであるうなあ」

「まったく、どうしちまつたんでしょねえ、ここんとこ変なことばかり。皇様が替わってからというもの、変なことばっか。税も厳しくなるばっかだし、ねえ、いやんなっちゃいますわ」

「…皇が替わったこととは関係ないであろうがのう」

女将の愚痴に嵐は苦笑しながら呟く。

「しかしまあ、おかげでこの宿も客でいっぱいではないか」

嵐が視線を巡らせながら言う。確かに粗末な簡易宿舎は現在では満室で、嵐同様足止めされた客が所在なげにぶらぶらしている。しかし女将はそんな嵐の言葉に大きく頭を振る。<sup>かぶり</sup>

「そうでもないですわ。こういう宿は元々長逗留するもんじゃないですからねえ。お客が次々入れ替わってこそやっていけるんですよ。正直、勝手が違っていつもより疲れますわ」

その言葉を裏付けするように女将は首をぐるぐると回しながら肩をとんとん、と叩く。

確かにこういった簡易宿舎では普段、客を長居させない。一晩か二晩の睡眠の場所を提供するだけで、食事も基本的に自給自足である。もちろん頼まれれば用意するが、それはあくまでオプションであり、別料金となる。

しかしこういった場合、そういうわけにはいかない。客としても外で食事しようにも雨で市場はほとんどが閉まっていて、満足に買いたい物もできない。また雨の中で火を熾して食事の準備をするわけにもいかないから、どうしてもどこかで食べさせてもらうか、或いは厨房を借りるしかなくなる。このような状況では、普段食事のサービスなどしない簡易宿舎でも、客のために毎食用意せねばならないということになる。普段とは勝手が違う上、実際のところ、あまり儲けにはならない。

「…このままこんな感じなら、料金上げなきゃいけないかもねえ…」

「…おいおい、それは客の前で言うことではなからう」

ため息を吐きながら言う女将を、嵐が苦笑交じりにたしなめる。

「…あら、そうでした。あんたも客でしたなあ」

あははは、と女将が豪快に笑う。

「しかしまあ、確かに変だのう、ここのところ…」

嵐は呟いて僅かに眉根を寄せた。

畑の浸水による作物の立ち枯れ、鼠の大群による被害、飛蝗<sup>バッタ</sup>の大群の出現、伝染病の発生などなど。その他にも嵐がここへ至るまでに耳にした異常事態の噂はやまほどある。

被害は西方地域だけではない。東では野獣が畑や民家を襲い、怪我人も出たという話である。

「何かが起こってるのやもの…」

他人に聞こえない声でぼつりと呟くと、嵐は女将のサービスしてくれた温かい飲み物を一口飲んだ。

「…お？これは…香草茶？か？」

「おやお客さん、よく知ってますねえ」

思わず目をぱちくりさせて呟いた嵐の言葉に、女将が嬉しそうな表情を向けた。

「いや、なんかいい香りがしておるとは思っておったのだが…これだったのか」

言いつつ、もう一口手の中のカップを傾ける。カップの中身は仄かに苦味のある、薄い褐色の液体であった。複雑な草の香りが嵐の鼻腔をくすぐる。

「珍しいでしょう？なんかねえ、今都で流行ってるそうなんですよ。何でも御妃様がお好きなんだそうで」

「ほう…御妃様が、のう…」

嵐が小首を傾げる。彼の記憶によれば、確か皇には現在正妃はいない。3年前、皇位を継承する前から、皇族としては当然のことながら、愛妾は何人も存在していた。皇はどちらかといえば好色な方で、武勇に長けたその容姿はがっしりとして逞しく、女性の評判も悪くはなかった。また皇は早熟でもあった。そんなわけで十代の頃から皇は何人かの愛妾をつくっていた。しかし皇太子として立てられても、皇位を継いだ後も、皇が正式に妃を立てることはなく、現在に至っているのである。

「何だかねえ、たいそう美しいお姫様なんだそうですよ。なんでもいつも金色にきらきら光っていてふんわりとお花の香りがして、歩



いた後には金色の光がきらきら降るんですって」

「ほう…」

「それでもってお顔もたいそう綺麗で、一目見たら忘れられないくらい、夢にも出てくるほどだとか。そんなお顔でいつもお優しく笑ってらっしゃるそうなんですよ。本当に、天女とはこのようなものか、というお方だそうですよ」

「ほう…」

「ほんとに、一度でいいからお姿拝見したいものだよ」

つまりは噂であって、見たことはないのではないかと嵐は思ったが、口にはしなかった。

「今の都では御妃様は大変人気者だそうだよ。娘たちはこそって御妃様みたいに綺麗になろうってんで髪形を真似たり服装を真似たり、お香やら食べ物やら、みんな御妃様みたいになりたいってんで、一生懸命らしい。男どもにも最近じゃあそういう女が人気あるそうだよ」

「ほう。それでこういう香草茶も来るのだな」

「そうなんですよ。都から来た商人が持ってたんで、少し買ってたね」

彼の記憶によればこのような香草茶は西域諸族諸氏の間に流通しているものであった。もちろんこれまで吐蕃国内になかったわけではないが、このような辺境にまで流通しているものではなかったはずである。第一、絶対量が少ない。吐蕃国内でも生産し始めたのだから、と嵐は考えた。絶対量が少ない、というのは、このような草や木などを煎じた飲み物は日常の飲料というよりも客人を迎えたときに振舞う特別なお茶であったり、儀式の際に用いられるものであったからである。またその他には薬として調合される場合もある。「あたしもねえ、これを飲んだら御妃様みたいにきれいになれるってんでねえ…」

（おいおい）

けっこう恰幅のよい中年の女将が恥らうようにややうつむき加減

で頬を仄かに染めていた。

（ま、体に良いものであるのは確かだからかまわんがのう）

思いつつ嵐はさりげなく視線を逸らして窓の外を見やった。

やや小止みになった雨の中、嵐は一人ぶらぶらと河辺を歩いていた。

山から流れ落ちる急流はここ数日の降雨を集めて泥濁りのした色で轟々と辺りの音を消していた。時折重たげに、根こそぎ引き抜かれた大木が浮き沈みしながら流されてくる。それが岸や川底にぶつかる衝撃で更に川岸から土砂が崩れ、轟音と地響きを生んだ。

「なるほどこの急流では橋も架けられぬし船も出せぬのう」

ぽつりと呟く嵐の表情は興味深げにきらきら輝き、その大きな瞳は何ものをも見逃すまいとするかのようにせわしなく周囲に向けられていた。その視線が土手から川に向かって下っていく階段を捕らえた。

「あそこから普段は川まで下りて船に乗るのか」

その視線を、川面を滑らせて向こう岸の土手の上方に移動させながら嵐は呟く。雨と霧のために見えにくくはあるが、そこには嵐のいる側と同じく階段と思しきものがあつた。しかし増水している今、河原はすっかり泥流に隠され、当然栈橋も船も見当たらなかった。船はこんなに増水する前に岸まで引き上げられていたのだろうか。でなくば船も失われてしまっているだろう。それでは近日中に水位が下がっても川を渡ることはいかないかもしれない、そんなことを嵐は考えていた。

「普段はこんな雨など降らぬから、渡し舟が数隻あれば事は足りておつたのだな。またここは川の上流だ。普段の水深は比較的浅いはず。わざわざ橋を架けるまでもないと考えられておつたのだろう。しかし……」

そのため今、川を渡れず難儀している者が実際大勢いる。川のこちら側、黄瀬では嵐を含め20人弱が渡河待ちで足止めされている。当然川の向こう岸でもそうだろう。この状態が更に何日も続けばその人数は増えていくであろうし、待たされる人間の疲労も苛立ちも募るだろう。それで何か面倒なことが起こらないとも限らない。何しろ沙漠の道といえば善良で温厚な人間よりも、荒くれ者や無法者の方がむしろ多いといわれているのだ。またそのくらいの気性がないと厳しい沙漠の環境を越えて行けるはずもないのだが。

嵐は丸太の積み上げられているのを見つけ、そこに腰をおろした。恐らく船か家屋を造るために切り出され、乾燥させられていたものであろう。樹皮はそのままであつたが、枝葉はきれいに刈り取られていた。そこで嵐はじつと周囲の様子を目に入れながら、考えを廻らしていた。

（なるほど、確かにこの川は普段は水深も浅く、川幅も狭いであろう。丸木を繋いだだけの棒つきれを河原の石の上に乗せるだけでも橋の役目を果たすであろうし、小船や下手をしたら筏のようなものでも渡河するには充分なのであろう。

しかし普段が穏やかであるからといっていつもそうとは限らぬ。それが自然というものではないか。現に今、この川は危険な存在と化しわしらを拒んでおる。その可能性を考えなかつたこの地の統治者は、やはり考えが浅いと言わざるを得ないのではあるまいか？）

更に嵐の視線は小雨に煙る風景について土手の様子をじっくりと観察する。

（川水か雨水かは判別つかぬが相当削られておる。堤防の跡も石垣の組まれていた様子も草の生えていた様子すら見えぬ。恐らく全く何も施されておらぬ土か岩の壁であつたのだろう。恐らくこんな大雨でなくとも多少の雨でも少しずつ土壌は削られておつたろうし弛み易くもなつておつたろう。今まで大きな災害が起きていなかったのが幸いだ。）

そのときちょうど流されてきた大木やら木の枝やら葉っぱやらの

塊が嵐のいる側の岸に激突してごうん、と重い轟音を立て、地を揺らした。

（……もしもわしならどうする？）

嵐は立ち上がって土手の際まで歩を進めた。嵐の足下2〜3メートルほど下で濁り切った水が渦を巻きつつ流れている。

（　　川に橋を架けるにはいくつか方法がある。その中でもこういう場にふさわしいものは限られる。　　吊り橋にするならばまず土手の補強工事から行なわねば無理だ。土を掘って土壌を強固に支える石の層や水を素通りさせる砂の層を作って　　ああ、その前に川に面した土手側も補強が必要だ。多少の雨風には削られないよう、表面を固めてできれば石か木で覆って　　そう、西国で産するというタールでもあれば完全であろうか　　それからよく乾燥させて端を焼いた丸太を柱として立てて　　向かい岸とロープで繋いでそこに渡し板を架ける

普通に橋を架けるにもやはり土手の補強は必要であろう。そうして川の中程と　　このくらいの川幅なら両河原にも一本ぐらいは柱が必要か。そこに柱石を置いて柱の支えも築いて　　川の中に立てるものには石組みの方がよいであろうな。そして　　）

そこまでばんやりと考えて、ふと嵐は我に返った。

（……わしは何を考えておるのだ）

自分自身に苦笑を禁じえなくて嵐は一人くすくすと笑った。

（…こんなことを考えてもわしには何もできぬのに。そもそも机上の空論でしかないこんな思考ゲームなど　　）

自戒とも嘲笑ともつかぬ笑みを浮かべながらそんなことを思っ嵐であつたが、それも最後まで考えることはできなかった。

「ああ！駄目だ！あんた！！早まつちゃあ！！！」

突然川の轟音をも圧する怒鳴り声が聞こえて、嵐は驚いて顔を上げた。声の聞こえたと思しき方に顔を向けたか向けないか、いきなり嵐はものすごい力で突き飛ばされた。

いきなりのことに動転する嵐の視界に、自分に組み付く黒髪の短

髪だけがかろうじて映り、それが何かと認識するよりも早く、そのまま彼は地面に叩きつけられていた。

「すみません、すみません!!」

先ほどから彼に対して何十編となく謝罪の言葉を口にして低頭する青年を、嵐は苦笑しつつ宥めていた。

「ああ、もうよいよ。確かにあんなところではうっとしておったわしも悪いし、こうして手当てしてもらったことだし……」

「そんなの、当たり前のことです！でも元はといえばオレが早とちりしたせいだし……」

確かに彼が早とちりであるということは、嵐も否定はしない。川辺で立っただけで自殺を疑われてはこの世の大多数の人間が一度は自殺を疑われねばならないということになる。もちろん、このような天候の悪い日に川を見ている人間もたいがい物好きだということになる。それでも川の様子を見に出てくる人間だっているわけで、何故自分の場合に限ってそのような誤解を受けたのか、嵐にとっても心外ではあった。

しかしその疑問も次の青年の言葉によって解決したようだ。

「てつきり女の子が川を覗き込んでじつと突っ立ってるように見えただもんで、これは危ない!」と……」

いやあ、早とちり早とちり、と照れた表情で笑う相手に、嵐は脱力を禁じえなかった。

(…女……)

確かに嵐は男としては背も低く、体格も細い。顔のつくりも童顔であるため、実年齢相応に見られた経験など、ここ20年程ない。

(しかしさすがにおなごと見間違われたことなどないぞ)

「あつ……!オレ、また失礼なこと言っちゃいましたか!？」

さすがに慚然とした表情になる嵐に、青年があたふたとする。

「ああ、もうよいよい……」

このままでは青年の謝罪はいつまでも終わりそうにない。嵐は苦笑しつつ青年を止めた。そして何気なく小屋の中に目をやる。

狭い小屋であった。その上斧やら鋸やら鎌やら籠やら、そういった道具類が場所を取っており、また作業途中の丸太や木切れがやや雑然と壁の二方に積まれていた。その他には小さな囲炉裏の側にちよつとした食器類と敷き藁が生活空間を形成していて、青年がここで寝起きしながら仕事をしていることがうかがわれた。嵐は囲炉裏端にかけてある自分の着ていた衣類に目をやって訊ねる。

「洗濯までしてもらったことだし……ところでいつ乾くかのう？」

「夜までには乾きますよ。幸いここは薪だけは山ほどありますからね！何なら少し持つていきますか？お詫びのしるしに……」

「……いや、気持ちだけ受け取っておく……」

嵐は先ほど青年に突き飛ばされたときに着衣を泥だらけにしてしまった。雨の中を出て来たため、雨合羽は着ていたがそんなものでは大して雨は防げず、元々着衣も濡れていたためか、ようやく地面から起き上がったときには相当ひどい有様になっていた。もちろん地面に叩きつけられて無傷でいられるわけもなく、腕や足は擦り傷や打撲だらけであった。そして何とか青年の誤解を解いた後、青年が謝罪として彼の手当てを申し出て、青年の仕事場であるというこの小屋に案内されたのである。

いわれのない誤解を受けて、しかもそのために怪我をしてしまった嵐としては青年に多少なりとも怒りを感じてもよいはずであったが、そんな気持ちには到底なれなかった。怒るにはこの青年、気性が善良すぎるのである。しかもそれを隠そうともせずまっすぐ向かい合ってくる。嵐としては苦笑して赦してしまうしかなかった。

「そういえばまだお互い名乗りもせんままであったのう。わしは嵐。都に上る途中で、この雨で足止めされておるところだ。そなたは……見たところ、樵か？」

「はい！オレはこの村で樵をやってます！親父もお袋も山師で……あ、

親父はもう……」

そこで青年は少しだけ言葉に詰まった。嵐はそんな彼を見て、本当に心根の善良な人間なのだな、と実感した。今時珍しすぎるほどに。「あ、と……それで、えーと、オレの名前は……ハク、といいます。百、<sup>ハク</sup>です」

「ハク、か。改めてよろしく。とりあえず、服が乾くまでは厄介になる」

嵐はにつこり笑うと青年　百の手を握った。

バラバラと木の葉を叩く音に嵐は窓の外に目をやった。再び大粒の雨が降り始めたらしい。樵小屋の小さな窓の外はたちまち灰色の線に閉ざされてしまった。嵐は思わずふうつとため息をついてしまう。

「ところで百よ、ここから先に進むためには他のルートはないのか？」

「へっ？他の、ルートですか？」

なにやら囲炉裏の向こうでやっていた百が嵐の声に振り返った。

「どうやらしばらく雨は止みそうにない。しかしわしとてそんなにここで足止めされるわけにもゆかぬ……川を渡る以外で何か、この先に進む方法はないのかのう？」

嵐が早く旅を再開したい理由は色々あるが、一つには懐具合がさほど潤沢ではない、ということである。そもそも大金持ちなわけでもなく、皇都・大都に着くまでに必要な程度の準備しかしていない。別に数日のうちに路銀が尽きてしまうというほど逼迫した状況ではないが、余計な出費は抑えたいというのは当然のことであろう。その他には大都に着くのがあまりに遅れては彼の計画にも齟齬を来たしかねないということである。

彼は物見遊山のために旅をしているわけではない。かといって精密な計画が立てられているわけでもないが、とにかく大都へ行き、

そこで行なわねばならない使命があつた。そして何より、嵐自身が、一刻も早く吐蕃皇国へ行き、首都・大都へ行き、その様子を自分の目で耳で全身で知りたかつた。黄瀬のような辺境の小さな街にいても吐蕃の様子は知ることができる。噂や伝聞、公式声明なども数日遅れとはいえ、きちんと届いてくる。しかしそれは断片的な情報でしかない。千の情報からその姿を予想するよりも実際にそこへ行つて体験する方が何万倍も良いに決まっている。

「あんた、何処へ行くつて言つてましたっけ？」

「ああ、大都へ行きたいのだが……」

「大都か……ところで何しに行くんです？見たところ商人とかつてわけでもなさそうだし、傭兵とかにも見えないけど」

少し考えるような表情をしていた百がふと興味を持ったように嵐を見た。

「ああ、向こうで少し仕事があるのだよ。しかしとにかくわしが行かねば詳細が決まらんといい加減な話でう。まあ、そんなわけだからなるべく早く大都に着きたいのだが……」

「へえー大都で仕事かあ。かつこいいなあ。でも何か大変なんですねえ」

百の問いを嵐はさらりとかわし、当り障りのない返事をした。しかし百はそのことに気付かず、或いは特にその返事に期待していなかったのか、納得したようであつた。

「とにかく大都へまっすぐ着きゃいいんですか？特に途中どこかへ行かなきゃならんとか……」

「それは特にない」

もちろん嵐にとって吐蕃は初めて行く国であるから様々なところを見る事ができれば彼自身嬉しいし今後のためになる、とも思うが、それは彼にとって特に優先事項ではなかつた。

「ふーん、それじゃあ、川を渡るよりもここから少し沙漠へ引き返して北ヘルートを取つたほうがいいかもしれませんねえ……」

「北　か？しかしそれでは沙漠を突っ切るといふことか？」



「沙漠の道」は確かに沙漠地帯を横切るルートだが、そこは通商路として整備され、途中旅人のための施設がきちんと設けられている。だからこそ苛酷な沙漠の環境でも人間が生きて、安全にちろん完全に身の保証がある、ということでは決してないが旅をすることができるのだ。

しかしその道を一步外れると、そこは容赦ない沙漠の世界である。少なくとも素人が生き延びることのできる環境ではない。そこで生きることができるのは沙漠に適応した動植物。そしてそこでの生き方を身に付け、順応した人々。その名に「砂漠」の名を戴く民族、「砂漠の民」くらいのものである。

間違いなく嵐は自分が沙漠を突っ切る旅などに耐えられるとは思えなかった。

「いや、沙漠を突っ切らなくてもいいんですよ。もちろん楽なルートじゃないけど……でもその道なら川を渡るのはもつとずつと東の方になるし……そしたら随分楽なはずだし、橋も架かつてる、立派な道まで出られるはずですよ」

「ほう、そんな道があったのか。それはありがたいのう！」

沙漠、と聞いて眉を顰めていた嵐であつたが、百の言葉にぱっと表情を輝かせた。

「それはどういう道だ？是非教えて欲しいのだが」

身を乗り出してくる嵐に、百は何となく申し訳なさそうな表情になる。

「あー、ええと、言つとくけど、楽な道じゃあないですよ？山越え

まあ、そんな険しい山じゃないけど山道が続くし、このまま東へ出て沙南へ行ったほうがずっと安全で楽な道なんですから。どっちかというところちの方をお勧めしますけどね……時間はかかるかもしれないけど」

しかし嵐は引かなかった。

「構わんよ。多少の危険は承知の旅だ。それに困難な道とはいえ道として整備されておるのであろう？であればわしは構わんよ」

「まあ、東への道よりは少ないけど吐蕃へ直行しようって人は結構通ったりしますからね…大丈夫ですけど」

そう言うと、百は頷いた。そしてその辺りに転がっていた棒切れを拾うと、地面に線を引き始めた。

「えーとですねえ、ここが今いるところで、で、これが川で…」

数分後、嵐は百の説明した地図を頭の中に叩き込んだ。百の説明は決して分かり易いものとはいえなかったが、不足分は嵐の理解力と記憶力で補っていた。

「いやあ、助かったぞ百。そうだ、何か礼をせねばのう」

にこにこしながら言う嵐に、百が慌てたように頭を振った。

「いや、オレ、そんな大したことでないし！礼どころかあんたにケガさせてるし！そんなの気にしなくても…」

しかし嵐は譲らなかった。

「そのことなら既に充分に返礼を受けておる。それとこれとは別だ。まあ、旅の途中のわしにできることというても大したことはないが、何かわしでおぬしの役に立つことがあればわしは嬉しいのだが」

尚も百は恐縮していたが、にこにこ屈託なく笑う嵐を見ると、何となく気持ちが楽になってきていた。嵐の笑顔を見てみると、百の力みが抜けて何となくほっとできるのである。嵐はそもそも人懐こい外見の持ち主であったが、その纏う雰囲気や言動がそれを倍化させているようでもあった。

（何か落ち着けるんだよな、この人と話してると…）

そしてこの人になら何でも気軽に話せる。ついそう思ってしまう、そんな柔らかな雰囲気を持った人物であった。嵐という人間は。

「あ、それじゃあ、あんた　薬とか、作れます？」

おずおずと、それでもどこか言いくそうに百が訊ねた。

「薬か？まあ、何でも、というわけにはいかぬが　そこそこ」  
嵐が軽く首を傾げるようにしながら答える。

「えーと、それじゃあ…もしよければ、欲しい薬があるんですけど…手伝って、くれませんか？」

やはり言いにくそうに、百にしては珍しく何度も口箆もりながら言うのを、嵐は少々不思議に思いつつ、にっこりと笑って頷いた。

「それでは決まりだな！　もちろんわしにできるものであれば、ということにはなるうが　可能な限り手を貸してやるぞ」

嵐の屈託のない笑顔に、百もつられるように表情を緩めた。そして　ふと思いついたように訊ねた。

「ところであんた、その口調はどうにかなりませんか。何かやけにじじ臭いんですけど。顔に似合ってますんよ」

「……」

百という青年、どうやら悪気も何もなく無邪気に言葉のナイフを突き立ててくる人間らしい。そう、嵐は心の内で分析し、そつと気付かれぬくらいにため息をついた。

### 3・奇病

百はこの年15歳。黒褐色の髪に濃い茶色の瞳。体つきはまだ成長途上であつたが、樵仕事で鍛えられているためか、同年代の青年と比べるとややがっしりとした肉付きで、背が高く腕がやや長かつた。

彼は黄瀬で生まれ育ち、物心つく頃には山師であつた両親の手伝いを始め、数年前からは独立して仕事も請け負うことのできる樵として、着々と地歩を築きつつあつた。しかしこれはこの辺りでは特に珍しい生い立ちということではなかつた。彼の両親の内、父親は数年前に山中での事故による怪我がもとで亡くなつていたが、それも山で働く人間としては特に珍しいことでもなかつた。

百の両親は子沢山であつた。成人した子供だけで8人。生まれることなく亡くなつた子供も含めて成長できなかった子供も、百の知る限りでは5人はいたということである。しかし決して豊かではない辺境の家庭ではこれも決して珍しいことではないのだという。

百は成長した子供の中では6番目の子供であつた。一番上と次の兄は辺境での貧しい暮らしを嫌い、都で一旗上げることが夢見て皇都からの労働力募集の告知に名乗り出た。既に便りも絶えて数年が経つという。また、3番目の兄は商人になることを志し、黄瀬に立ち寄つた商人に弟子入りして遠く西国へと旅立つた。今頃はカジャルかバルジャの東辺の国で商人見習として働いているだろうという。4番目は姉で、これは既に沙南の農家に嫁いで久しい。5番目の兄は3つほど沙漠側の村に住んでいて、山師の仕事をしているという。下の2人はそれぞれ年子の女の子で、既に隣村に嫁いだり奉公に出たりしているという。母親は今も現役で働いていて、もちろん年齢的なことから全盛期ほど激しい労働には耐えられないが、黄瀬の山の中の家を守っているという。

それらのことを風は、百の仕事場兼住居から彼の実家でもある母

親の住む家に行く道中で百から聞かされた。

「ほう…それでおぬしはこの街を出ず、御両親の跡を継いでおるということか」

嵐の言葉に百はくすぐったそうな表情で軽くかぶり頭を振った。

「跡を継ぐだなんてそんな大層なことは考えてねえけど…兄貴も姉貴も次々家を出て行っちゃったし、まだちっこい妹が2人いるのに親父が死んじまって、それなのにお袋をおいてどっか行くなんて考えられなかったんだ」

「しかしその妹御も既に家を出ておるのだろう。それでもおぬしは母御の側におるのだな。孝行なことではないか」

嵐がにこにこ百を見る。言葉遣いを裏切る少年のような　ともしれば自分よりも若いのではないかとすら百は思ったほどであった。無邪気とすら言える笑顔に、百はまぶしそくに頬を染めて、頭を振った。

「いや、ほんとにそんな大層なことじゃないんだよ…オレはそんな

—

そんな百の頑なな態度に、嵐は怪訝そうな視線を向けた。

百という青年は大らかで朗らかな性格の持ち主であった。それが出会って以降、言葉を交わし、その行動を見てきた嵐の受けた印象であり、そして嵐は自分の人を見る目というものに自信を持っていた。

しかし百はあることに關しては妙に口が重くなり、何やら含みのある物言いと表情をするのである。しかしそれは決して恨みであるとか憤りであるとか、そういった単純な感情によるものではない。

そんな単純な負によるもののみの感情ではなく、もっと様々な何かが百の中で複雑に絡み合っているのだろう。そういうことまでしか、この時の嵐にはわからなかった。

（ほう、何やら面白そうではないか）

嵐はこの人の良さそうな青年に興味と好意を覚えた。

「かあちゃん、具合はどうだい？」

百が嵐を連れて来たのは黄瀬の街から十数分ほど緩やかな山道を登ったところにある、やや開けた小さな棚のようなところに建てられた、小さな古びた家であった。家の前からの視界は木々に遮られてはつきりとは見えなかったが、歩いてきた道のりを考えると、黄瀬の街からは多少外れているはずだ、と嵐は推測した。恐らくこの棚は山の東側斜面に張り出しているもので、山を背にして見れば、正面には川があり、向かいに嵐のまだ見ぬ沙南公国があるはずである。

更に嵐たちが登ってきた道はまだ上へと続いており、その先は雨のために濃いガスがかかっている、山頂がどの辺りにあるのか、よくわからなかった。

家の横には薪がきちんと詰まれており、鋸や鉋などが、いつでも使えるような状態で壁にかけられていた。家の周囲には作業途中で放り出されたままの丸太が数本転がり、長雨にさらされて泥まみれになっていた。しかしそれ以外はきれいに片付いており、住人の几帳面な性格が表れているように、嵐には思えた。

百が入り口から家の奥に呼びわりながら入って行くのに続いて嵐も家の中に入った。薄暗い室内に目が慣れてくるにつれて内部の様子が嵐にもはつきりわかってきた。

小さい家とはいっても総勢8人の子供が育てられた家である。もちろん8人の子供が揃ったことは、百の先ほどの話から、なかったことがわかるが、それでも4、5人は確実に共に生活していた空間である。それなりの広さと物の多さとやや雑然とした感のある、小ぢんまりとした住まいであった。

嵐が今いるのは、入り口兼厨房兼、作業場兼物置といったところで、一方の壁際には竈や水桶や調理用具の置かれた棚などがあり、他方には作業着らしき笠や外套、背負い籠や杖、斧や鉋などがそれ

ぞれきちんと整理されてあった。

土間に続いて板間があり、そこには囲炉裏が区切られてそこで暖かそうな火が燃えていた。そしてその側に簡素な寝具がしつら設えられて、上半身を起こした女性がこちらを向いていた。

「まあ、百。よく来てくれたねえ。そちらはお客さんかい？」

やや掠れた力無い声ながら、恐らく普段は豊かで力強い、温かい声なのだろうと思わせる響きで、百の声に返答が返る。

「うん、そう。こちら嵐さんというんだ。ええと」

そこでなんと紹介したものかと口籠もる百を引き継いで、嵐が口を開いた。

「はじめまして。わしは嵐と申します。旅の途中この黄瀬で雨のために足止めされておるところで、百殿と知り合い親切にしてくださいました。聞けばお母上がなにやら身体の具合が悪いとのこと。そこで百殿の親切に報いるためにも何かわしに力になれることがあればと思ひまして、こうしてお邪魔した次第です。突然の訪問の非礼お許しください」

ぺこり、と嵐が頭を下げると、百の母親はぱちぱちと瞬きをして、それからやっとなつて慌てたように礼を言いつつ頭を下げた。

そんな光景を眺めつつ、百は不謹慎と思いつつも思わずにいられなかった。

（　　もしかして嵐さんて流しの芸人さん？）

嵐の時代がかった言葉遣いは、百にとっては時折街を訪れて小さな公演をしていく大道芸人の寸劇で耳にする台詞を思わせるものであったようである。

百の母親はここ数年体調不良を訴えることが多くなっていた。

全身がだるいだとか、身体の節々が痛くて身体を動かすことさえ億劫になったりだとか、鼻や喉、目がちかちかして息を吸うことさえ難儀になって、更に頭痛や全身の倦怠感を増してしまったりだと

か、大体そういう症状で、最初の頃は恐らく過労か風邪を引いたものだろうと思われていた。しかし幻聴や幻覚の症状が表れ始めてようやく、どうやらこれは単純な体調不良などではないということに、周囲の人間が気が付いた。

幻覚症状は、大抵自宅にいたときに起こっていた。気が遠くなるような感覚の後、ふつと視界に霞がかかる。そして自分がどこにいるのかわからなくなる。自分が今何をしているのか、どんな格好でどんな行動をとっているのか、その症状が表れている間は全く正気を失っているし、その後意識が戻った後も記憶に残ってはいないのだという。

ただ、その症状が表れている現場を見た者は、何やらひどくものに怯えて暴れまわり、周囲を傷付けたり、或いはひどく幸せそうに表情をだらしなく緩め、何かおかしいことがあったかのように突然笑い始めたり意味不明な言葉を吐いていたと証言する。

「とにかく何が何だかよくわからないですよ。そんなときのかあちゃんに話し掛けてもまるで何を言ってるのかわかってないみたいだし、なんかオレのこともわかってないみたいで……まるでかあちゃんがかあちゃんじゃないみたいで、怖いんだ……」

大きな体軀をしょんぼりと縮めて俯く百に、母親が申し訳なさそうな表情に顔を歪める。

「あ……もちろん、かあちゃんが悪いってんじゃないからね！病氣なんだから！ちゃんと治せばいいんだから、だから……！」

「ああ、ああ、わかつてるよ」

母親の表情に気付いた百が、慌てたように顔を上げて笑顔を母に見せる。母親もそんな百に弱々しい笑みを見せた。

「しかし今日はどうやらお加減がよろしいようですね」

そつと嵐が母親に声をかける。

「ええ、そうなんです。ここ数日は変なものも見ませんし、体調も大分良くなってきたみたいで……」

そう言って母親は微かに表情を緩めた。確かにその笑顔はまだ痛々



しかつたし声にも張りはなかったが、その頬には赤味が差していて、呼吸にも異常は特に見当たらなかった。

（呼吸の異常、幻覚症状、そして全身の倦怠感…）

嵐はその症状を頭の中でリストアップし、それに適合する病氣の原因を導き出そうとしていた。

（ここ数日は、体調は回復に向かいつつある…というよりも、異常は起きておらん、というわけか………　ここ数日？）

少し確認したいことがあつて、嵐が口を開こうとした。そのとき、入り口の戸が無造作に叩かれて、男の声がした。

「ユアンさん、どんなかね？」

その声に返事を返しながら百が戸を明けに立つ。

「おお、ハクも来とつたんか」

入つて来たのはまるで熊のような、という第一印象を十人中七人までに与えるであろうずんぐりした男で、毛皮の袖無しを着込み、腰帯に鉈を差したその姿は、一目で山で働く者であることが嵐にはわかった。そしてその後ろからもう一人、男が入ってくる。

「<sup>キン</sup>斤さん？こちらは…？」

百が斤と呼ばれた山男の後ろの人物を見て首を傾げる。どうやらそちらの人物と百は面識がないらしい。

「ああ、この方は　ほら、ユアンさん、話しとつたろう？この辺に砂漠の人が来とると。それで是非にとお願いして来てもらったんだ。　ところで、ハク、そっちの方は？」

斤が嵐を見て先ほどの百と同じように首を傾げる。

「ああ、こちらは嵐さんで　」

そして百が簡単に嵐を紹介する。

「それで斤さん、砂漠の方を何でこんなところに？」

嵐は彼らが斤の連れて来た人物に相当の敬意を払っていることに気が付いた。百もユアンと呼ばれていた百の母も、彼を連れて来た斤も、その男に丁寧な態度と言葉を遣っている。

（　　そうか、「砂漠の方」ということは、この者は砂漠の民の一

員か  
)

そのことに嵐は思い当たり、彼らの態度に納得がいった。

砂漠の民は悪い言い方をすれば事情を抱えて故郷を捨てた無法者たちの集団である。もともと住んでいた土地に何らかの事情で住むことができなくなった者。その中には犯罪者もいると言われているが、たちが漂泊と流浪の末、およそ人間の住むことのできない環境である沙漠地帯にまで行き着き、そこで団結し、独自の生きる道を選んだ、それがそもその沙漠の民の原型であるといわれている。

そんな無法の集団であるから、周辺の国や、この辺り一体の総主権者である吐蕃からも何かと警戒の対象とされている。

しかしその一方、「砂漠の民」は周辺住民、特に沙漠地帯に接して生きている者たちから、一種の尊敬を受けている。それが何故なのか、砂漠で生きる知恵と術を身に付けた彼らへの尊敬の念であるのか、それとも一部の伝説に言われる、元々沙漠の民を形成したのは天から降りてきた神の子孫であるということが信じられているためなのか、中央政府の影響を拒絶することすらある、その独立精神に憧れられているためなのか、その辺りははっきりしないが、とにかく沙漠の民は一部で高潔で神聖なものだと畏敬の念を受けていることは事実であるという。

そんな嵐の知識に、彼らの「砂漠の方」への態度は合致していた（なるほどのう。砂漠の民が　確か彼らの中には医療の知識に優れた者が多いとも聞くが　）

そんな嵐の思考を読んだかのように、斤が百たちに説明をしている。「この方は薬草に詳しいそうだ。大抵の病気に効く薬を処方できるということなんだ。それで、是非にとお願いして来て頂いたんだ」

「まあまあ、それは本当にどうもありがとうございます。こんな不便なむさくるしいところまで」

「いや、お気になさらず。果たして私が役に立てるかどうかもまだわかりませんし」

しきりと恐縮する百の母に、その人物は穏やかに笑って首を振った。その人物は30代前半くらいの穏やかそうな男であった。砂漠の苛酷な環境で暮らしているためか、やや痩せ気味で頬などはこけているといってもいいくらいであったが、よく日に焼けたその表情からは、彼が非常に健康な心身を持っているということがうかがわれた。頭はくたびれた色の布で覆われ、なるべく肌の露出しないような、頭と同じ、くたびれたような白い布の服を着ていた。しかしその表情や言葉遣い、物腰がともその年齢にふさわしくないほどに落ち着いていて、見る者に安心感を与える、そんな雰囲気を持った男であった。

「ところで、嵐さん、でしたね？」

不意に振り返られて、つい嵐はびっくりとしてしまった。別にやましいことはないのだが、何となく彼のことを観察するように見ていたものだから、突然話題が振られて驚いたのである。そんな嵐の様子に気を悪くした様子もなく、彼は嵐に軽く会釈をした。

「聞けばあなたも医術の心得があるとか。私は聞いている通り薬草には多少の知識があります。できればお力を貸していただきたいのですが」

あくまで穏やかで腰の低い彼に、嵐が苦笑を返す。

「いや、わしも医術は専門というわけではない。だからおぬしの知恵を貸してもらえれば嬉しい。どうやらこれは単純な病というわけではないようだからのう」

「というと？」

それまで彼らの会話になるべく口を出さないようにしていた百が思わずといった風に口を出した。この場で一番病人のことを心配しているのは、身内である百であることは言うまでもない。ゆえに心配

でいても立つてもいられないといったところなのだろう、と嵐は思った。

「うむ、その前にもう少し訊いておきたいことがあるのだが、よろしいか？」

後半を病人に向かつて、嵐が言った。そして頷く彼女にいくつか質問を向ける。

「ここ数日体調が良いということだが、それはいつ頃からのことができるか少し正確に思い出せるかのう？」

「ええ…どうでしょう、やっと体調がいいといえるようになったのは二、三日前からですけど…」

「幻覚は？」

「はい、それはもう随分…」

「確か、このあいだ来たとき、幻覚とか見てないって言ったよね」  
百の言葉に嵐が視線を向ける。

「この間来たのは、いつの頃だ？」

「ええっと…確か、雨が降り始めてすぐですよ。変な時期の雨だったし、全然止まないから、かあちゃん大丈夫かなって来たんで…」  
記憶を探るような表情で、百が答える。

「つまり雨が降り始めた頃から幻覚は見えなくなった、と…」

「ええ…そうですね。そういえば変なものが見えたりとか聞こえたりとかはその辺からないですねえ…」

彼女もぼんやりとした表情ながら、記憶を確かめるように頷く。

「その幻覚だが…どんなときに見えるとか、そういうのはわかるかのう？」

「どんなときと言っても…何か、何でもないときですよ。いい気持ちで仕事をしているときなんかにつつと変な気分になって…」

「そういえば前、山で仕事に倒れたこともあったよね。どこだったけ…ほら」

「おお、確か山のお屋敷の周囲の木の手入れをしているときだったのう。あの時はたまたまわしが近くにおったんじゃないか…」

「山のお屋敷？」

嵐が斤の言葉に鋭く反応した。

「山のお屋敷とは？」

嵐の問いに、斤がぼりぼりと頬髭を掻きながら答える。

「ああ、お屋敷と言つても今はもう誰も住んじやおらんのだがな。昔　確か沙南の貴族の誰だかがこの山の上に別邸をお建てになつたんだよ。まったく酔狂なもんだが。それで普段は誰も住んでおらんが、まだお屋敷は手放しとらんらしいし、こんなところに空家があつたら物騒だろう？だから山で仕事をしとるモンが時々交代でお手入れしたり見回りをしたりしとるんだよ。その分はきちんと黄瀬の長から報酬もらつとるしな。まあ、結構荒れとるがまだしつかりしたもんだぞ？」

「本当に、今は誰も住んでおらんのか？」

「ああ、いつか使うとかいうことなんだがな。何しろこんな山ん中だろう？よつぽど酔狂じゃなきや来やしねえよ。数年前に少しの間住んどつた奴がおつたが　そいつもいつの間にか来んようになったしの」

「数年前　」

嵐がぼつりと呟きながら視線を宙に漂わせた。これは嵐が深く物事を考えているときの癖なのである。

しばらく考えを廻らしていた嵐が、砂漠の民の男を手招きして立ち上がった。

「ちと訊ねたいことがあるのだが……」

男は頷いて立ち上がると、嵐に続いて入り口の戸をくぐつた。入り口の軒先で雨を避けながら、二人は向き合つて立つた。

「おぬし、砂漠の民であろう。であれば解毒薬は作れるか？」

自分より10センチほどは背が高いであろう男を見上げるようにしながら、嵐が尋ねる。

「解毒薬ですか？はい。実は私、毒に関する知識には自信があるんです」

男は少し目を見開いたものの、素直に頷く。

一般に、砂漠の民は毒とその対処法には詳しい。なぜなら沙漠地帯の植物や動物には毒を持つものが多く、それを全く知らないでは簡単に命の危険を招いてしまうからなのである。

「そうか。それでは体内に蓄積した毒を取り除く薬など、作れるであらうか？」

「といいますと？ 具体的には」

「例えば、気化する性質を持つ毒　　というか、そうなのうはつきり言うなら麻薬、かのう　　」

「麻薬　？」

嵐の言いにくそうな言葉に男が目を光らせる。

「いや、彼女が自主的にそれを使用したとは全く思っておらん。それにまだ確認したわけでもない　　だが、引くかかることがあるのだ。それは　　」

それまでも彼らは室内になるべく声が聞こえないように声を落としていたが、嵐は更に声を潜め、男の耳に口を寄せて説明を続けた。

嵐の説明を聞き、男はしばらく考えていた。嵐の言ったことを彼の中で検討しているようであつた。

「　　そうですね、その可能性は確かにあります」  
しばらくして男が頷いた。

「彼女の症状からは、その可能性が充分あります」

慎重に言い直す彼に、嵐は頷く。彼は信用してよいと、嵐は思った。物腰も品があり、頭も良い。しかし己の才に溺れるということもない。嵐は砂漠の民と出会い、話をしたのは初めてであつたが、このような人物が砂漠の民というのであれば、確かに尊敬に値する、と彼は思った。何故か以前、沙漠の村で出会った女戦士を思い出し、嵐はふと首を傾げる。

（何故あやつのことを思い出したのだ。　　この者とは全く似ておらんのに　　）

似ているとすれば沙漠に生きている人間であるということと、それ

と

（そうか、どこか品のある物腰、か　もしかしたらあやつも砂漠の民であつたのかもしれないのう　）

しかしそれは今は関係のないことである。嵐は飛躍しすぎな思考をストップさせ、目の前の男に改めて視線を向けた。

「おぬしには彼女の診察を頼みたい。単なる病気や怪我ならわしも看ることができるのだが、予想が当たっておるとすれば、わしには専門外だ」

「引き受けました。それで私はあと　」

「薬に必要な物は何でも言ってくれ、用意するから。調合の手伝いならできるしのう。それから、診察の結果、　もしわしらの予想が当たっておったら、それはわしだけに教えてくれぬか。無駄に彼らを不安にさせることもあるまい」

「　それは、そうですね。何とかその辺は対処しましょう。でもそれで貴方はどうするのですか？」

「そうだのう。原因は取り除かねば彼女の病気は治らぬしのう」

嵐は腕を組んで何やら考えるように首を傾げて見せる。その表情は平素のもので、男には嵐が何を考えているのか、図りかねた。

「　危ないことは、しないでしょね？」

それでも何か不安に思うところがあつたのか、恐る恐る、といった風に囁く。嵐はそんな男にっこりと笑いを返した。

「危ないことなどせぬよ。何か不安か？」

薬師の男が診察をしている間、嵐と斤はそれぞれ表へ出ていた。

斤は落ち付かなげに家の中の様子をうかがいながら軒下にしゃがみこんでいた。嵐はしばらく同じように軒下にたたずんでいたが、やがてふつとその場を離れ、家の裏手に回っていった。隣りにいた斤が気付かないほど、さりげない行動であつた。

やがて百が診察の終わったことを告げに出てくると、斤はそわそわと中に入っていた。

「あれ、嵐さんは？」

百が戸口できよきよと辺りをうかがっていると、その後ろから薬師も顔を出した。

「おや、あの方はいらつしやいませんか？」

そんな二人にのんびりと声かけられる。

「おお、診察は終わったのだな」

「あれ、嵐さん、何してたんですか」

ひよつこりと現れた嵐に、百がきょとんと目を見開く。無理はない。現れた嵐は何をしていたのか、しと降る雨に濡れて、両手を泥だらけにしていたのである。

「いや、ちよつとな…で？どうであつた？」

台詞の前半を百に、後半を薬師に向けながら、嵐が問いかける。薬師は頷いてから、百に視線を向ける。

「申し訳ありませんが、白湯と濡らした布をお母さんのところに持つていつてあげてくれますか？それで身体を楽にしているようにと私はすぐ戻りますから。…あ、あと、お湯をお鍋いっぱいには沸かしておいて欲しいのですが」

「は、はい…」

少しだけ残りの表情を浮かべたものの、百は素直に頷いて家の中に戻っていった。それを見送ってから、薬師は嵐に目配せをして表に出た。

「…やはりか？」

家から少し離れた大木の下で雨をしのぎながら嵐が尋ねた。尋ねる、というよりも確認に近い表情であつた。

「ええ…少々分からない点はあるのですが、まず間違いなく中毒症状ですね。似たような症状を見たことがあります。ある種の毒物を



摂取したときに幻覚が見えたり幻聴があったりします。それは飲食物であることもあるし…ときには気化させて直接吸い込んだりすることもあります」

「麻薬か。…西域の方では祭祀の際に用いることもあると聞いたが」「そうですね。確かにあちらの方では香を非常によく用いますから…祭祀以外にも貴族階級の人々や金持ちの人間の間では日常に用いたりしていますよ。特に女性が好むようですが…」

そこでふと薬師は表情を変える。

「…もしかして貴方は彼女がそのようなかわしい薬を使用していたとでも？」

そのいささか咎めるような表情と口調に、嵐は一瞬驚いたような表情を見せ、慌てて頭を振った。

「誤解するでない。わしとてあの者がそのようなことをする人間だと思わぬ。もちろんあの者と会うのは先ほどが初めてであるが、百

あの者の息子を見ておればそのような暗さとは無縁。それを見れば育てた母親もどのような人間か想像がつくというものだ」

「そうですね。すみません」

嵐の表情と口調に、薬師はふっと表情を緩めて頭を下げた。

「だが…しかし、気になる点はあるのだよ」

「…と言いますと？」

薬師の前に嵐が握った手を差し出し、そっと広げて見せた。そこには泥水にまみれた木の皮のかけらのようなものがあつた。

「ここをよく見てくれぬか」

「……？」

嵐が示すのに、薬師が目近づけてじっと見つめる。

「苔が生えておるだろう？その一部だけが変色しておるのだ…分かるか？」

「……ああ、確かに」

でもそれが何か？と視線で問いかける薬師に、嵐が細い木の枝の先でその苔の部分を示して見せる。

「この部分に何かこびりついておる。…なにやらの結晶のように見える。そしてそこだけが変色しておるのだ」

確かに嵐の示した部分の苔の先に薄黄色い粒があった。それは苔にしつかりとくっついていて。というよりも、むしろその場で固まってしまったかのように複雑に苔に絡みつき、ちよつとつittedくらいではまったく取れそうもない。

「これは家の裏で見つけたものだ。裏の勝手口の近くに水場があったな。その近くに生えておった苔に、いくつかこのようなものが見られた。気になるものはできるだけ取り除いてきたのだがな」

「これが何か？」

確かにこの結晶が不自然なものであることは薬師にも分かった。苔はきれいな水のある場所に生える。その植物が枯れたり何らかの異常を示しているということは、それが何らかの理由で有害なものであるということを示しているといって過言ではないのだ。

「おぬしが分かるかどうか、分からぬが　この結晶から、何やら嫌な匂いがする。ほんの微かなものゆえ、気付きにくいとは思うが　」

「匂い!？」

嵐の言葉に慌てたように薬師がもう一度その結晶付きの苔に顔を寄せる。そして何度か鼻をひくひくとさせていたが、彼は首を傾げているだけであった。

「それでな、その匂いが　あの家の中に微かに匂うものと似ておるのだよ」

「　何か、匂いがしましたか？」

その言葉に慌てたのは、今度は嵐であった。

「お、おぬし…何故ここに!？」

慌てて振り返って目を丸くしている嵐に、百はにつこりと笑って元気良く答えた。

「オレ、耳はいいんです! ついでに目もいいんです。この変な粒、どうかしたんですか？」

嵐は軽く額を押さえながらしばらくして言葉を返した。

「…どこから聴いておった？」

「香りが何とか、とか。オレ、馬鹿なんでよくわかんなかったんですけど」

ほぼ始めからではないか、と嵐は眩暈を感じながら深くため息をついた。薬師もいきなり現れた百に呆然とした表情を見せていた。

聞かれてしまったものはしょうがないと、嵐と薬師は改めて百に説明した。

「…つまり、お袋は何か変な薬みたいなものをどつかで吸っちゃって、それでだるくなったり変なもんが見えたり聞こえたりしてるって、そういうことですか？」

しばらく頭を抱えた後で確認するように言った百の言葉に、嵐は頷いた。

「そういうことだな。念のため訊くが、おぬしは具合が悪くなったことはないか？何日かおきに母上のところに戻っておったのだろうか？」

「そうですね。食事と一緒にすることもあるでしょうし…どうですか？」

彼らの問いに、百は首を捻るが、やがて頭を振った。

「いや、そんなことはないなあ。オレ、だいたい病気なんてしたことねえし。怪我とかはまあ、よくあるけど。でもそれもすぐ治っちゃうし。よくお袋は俺のこと「手のかからない子」だって言うもんなあ…」

少しだけ表情を曇らせながらそう言う百に、嵐は少しだけ首を捻るが、頷いた。

「食物や水に何か異変があるとするなら、お母上だけに異変が現れるというのはおかしい。現にわしとてこの街で何日も飲み食いしておるのだ。それにあの街におっても特に変なことには気付かなかった

た。ゆえに、この異変はこの周辺……この山のこの辺りに集中して起こっておりと考えられるのだ」

「……でも、今は何もありませんよ？彼女も最近は具合が良くなったと言っています」

「そう、ここ数日　雨が降り始めた頃からだと」

「それが？」

嵐が何かに気が付いていることには薬師も分かるのだが、それがどのようなことなのか、いまいち分からなかった。それが何だか悔しいような気がしながら、答えを促す。

「確証はない。だが、おそらく百の母上の病気はどこぞから漏れ出してきておる有毒な物質が原因の、中毒症状ではないかと思うのだ」  
「……どこから？」

薬師の問いに、嵐は軽く首を振る。

「少なくともこの家の周囲や家の中でないことは確かだのう」  
そう言つて軽く笑つて見せる嵐につられるように、薬師も力を抜いた。

（この人と話していると何だか力が抜けてしまうなあ　）

奇妙な脱力感を覚えながら、それでも彼はそれを嫌だとは思っていなかった。

「それにしても、何なんです？その毒って」

百が不満そうにどちらにともなく問いかける。

「そうだ、その毒物の特定はできなんだのか？」

嵐の問いに、薬師は首を振った。

「申し訳ありません。特定はできておりません。　　というよりも

」

「？」

「正直、見たことがない毒物である、としか思えません。私の知っている毒物の、いくつかの特徴を兼ね備えております。だからといって、複数の毒物に犯されているとも思えません　そんなことであれば、もっと症状はひどく、複雑になっているはずですから」

「新種の毒物、ということか？」

「少なくともこの沙漠地帯で手に入る毒物ではないということだけは自信をもって言えます」

力強く頷く薬師に、嵐はやや表情を曇らせながら思案するように腕を組んだ。

「じゃあ、お袋を治すことはできないんですか!？」

百の言葉に、慌てたように薬師が頭を振った。

「そんなことはない。不安にさせるようなことを言ってしまったて申し訳なかったが、対処する方法がないということではない。体内に蓄積した異物を体外に排出する薬、或いは中和させる薬で少しずつお母様の体は良くなるでしょう。その薬を処方することはできます」「本当に!？本当にかあちゃんは良くなる!？」

薬師の言葉に百が噛み付くように身を乗り出す。そんな彼の迫力に圧倒されそうになりながら薬師は頷いた。

「私の名にかけて。必ず貴方のお母様のご病気を治して差し上げます」

薬師の自信のある表情に、百もようやく落ち着きを取り戻した。

そんな二人を見つめながら、嵐も頷いた。そしてふっと視線を彼方に向ける。

「…後は、原因の物質を排除すること、か…」

#### 4・山上屋敷

（この間もわしは山を登っておったような気がする…）

大きく息を乱しながら獣道を多少ましにした感じの山道を登りながら、嵐は大きいため息をついた。

「嵐さん、だいじょーぶですかあ？」

1メートルほど上では百が元気に手を振りながら嵐を呼ぶ。彼の方とは言えば嵐と同じだけ歩いているはずなのにまったく言っていないほど息も乱さず、足取りも軽やかである。

（ 若者はええのう）

微妙にずれたことを考えてしまっている辺り、嵐の身体の疲労は相当のものであるようである。

そもそも何故現在彼らが小止みになったとはいえ雨の降り続く中、山登りなどしているのかというと、元は嵐が言い出したことなのであった。

『山のお屋敷』はどこにあるのか、と嵐が尋ねた。尋ねられた百は何故そんなものを気にするのかと不思議がりながらも答えてくれた。

「えーと、この家の前の道をずうつと登つてくとあるんだけど…前は道ももつときちんとしてたけど、もうほとんど使う人がないから埋もれちゃってるし。道を踏み外すとへたすると崖になってるから下の川まで一直線に落っこちちゃうし。道が埋もれちゃってるから間違った方に行っちゃうと多分迷いますよ。でもお屋敷の辺りはそこそこ拓けてるし、木も草も適当に管理してあるからそこまで行けば多分お屋敷はすぐ分かります」

「…迷うような道なのか？」

尋ねる嵐に百は少し考えて頭を振った。

「とりあえず上の方へ歩いて行けばここからはほぼまっすぐ上なん  
で、そう迷うこともないと思うっすよ。森で感覚さえなくしちゃわ  
なければね」

「時間は？」

「ん〜…それほどでも」

ぼりぼりと頭を掻きながら百が答えると、嵐はふむ、と何やら考え  
るようなそぶりをした。

「…これから行くんですか？」

百が尋ねると、嵐は顔を上げた。

「何で？もうあそこは何年も人が住んでないですよ」

百のもっともな疑問に嵐は困ったように首筋に手をやった。

「まあ、確証はないのだが」

そんな嵐の表情にじっと目をやってから、百はぐつと顔を近づけた。

「オレもついて行きます！」

「…へ？」

嵐はアップになる百の顔の圧迫から逃れるように後じさりしながら  
目を丸くした。

「かあちゃん、病気の理由があるって考えてんでしょ！？だったら  
オレも行きます！」

「…おいおい、何も今すぐ行くとは……」

「行くんでしょう？」

嵐が抗弁しようとするのを遮って百が続ける。

「それに迷っちゃったら困るでしょ？まだ日暮れには遠いけど雨降  
りだから暗くなるのも早いし。オレにとっちゃこの山なんて目つづ  
つても歩けるし。絶対オレ連れて行った方がお得ですよ！この辺じ  
やあんまり出ないけど化け物が出てオレが追っ払ってやりますし  
！……オレ、役に立ちますよ！」

嵐に何か口を挟ませる暇も与えず、百はまくしたてた。

何故か、百は必死であった。理由はなかったが、百は嵐が今すぐ  
にでもここを出て山の屋敷へ向かう、そう確信していた。そして嵐

がそこに母親の病氣の理由があると考えていると、確信していた。

百自身にも何故自分がそう思うのか、不思議であつた。そもそも彼は勘の良い方ではない。賭け事をして勝つたためしが無い。他人の感情にも鈍感だとよく言われる。それで今まで深刻に誰かを傷付けたことはないらしいのは幸いである。それどころか早とちりの癖があつて失敗したり早合点で恥ずかしい思いをしたことなど数え切れないほどある。山での仕事には勘を働かせて危険を避けねばいけない、と両親からは教えられたが、これは教えられて身に付くものではなかつた。彼が今まで山仕事を続けてきて大怪我をしたことが無いのは、ひとえに彼の鍛え上げられた運動神経と頑丈な肉体のお陰である。

しかし彼は今、確信していた。それもいつもの早合点であつたかもしれない。しかし百は必死だつた。そんな彼の表情を、嵐は困つたような顔で見つめていたが、やがてふうつと息を吐いた。

「…案内してくれるか？」

その嵐の言葉に百がぱあつと表情を輝かせた。

「もちろんです！」

（…まあ、よいか）

先ほどの深刻な、追い詰められた子供のような表情から一転、無邪気に嬉しそうな表情を見せる百に、嵐は内心苦笑する。

この年齢でこんなに純粋な心の持ち主は珍しい。それはある種、感謝すらしてしまうほど。

（それともわしがひねくれすぎなのか？）

思わず百の年齢の頃の自分に考えがいきそうになつて、はたと止める。それは意味のないことであつたからである。

ともかく行くと決まつたからには早い方がいい。そんなわけで百の母親の看病をしている薬師とそれを手伝っている斤には何も告げず、彼らは山上の屋敷へと出かけたのである。それが約一時間ほど前のこと。



「おぬし……それほどでもない」と言っておらんかったか？」

ぜえぜえと息を切らせた嵐が百に恨みがましい視線を向ける。対する百はまったく平静な表情できよとした目を嵐に返す。

「え？まだたつた一時間ほど登ったくらいですよ？道だってそんなにきつくはないでしょ？」

（いや、わしにとつては充分きつい）

そう、喉元まで出かかったが、嵐は何とかそれを押し込めて大きく深呼吸をした。

それにしても、と嵐は思う。

（それにしてもわしは山と縁が切れんようだのう。わざわざ山岳ルートを外して砂漠の道を選んだというに）

旅を始めるとき、嵐にはいくつかの選択肢があった。

同行者を求めることも可能であつたし、武器や術具をもつとたくさん持つてくることだってできたのだ。そもそももつと楽に、一気に皇都へ送ってもらうことだって可能だったのだ。嵐さえ望むなら全ての希望は叶えられたであろう。それだけのものを、“そこ”は有していた。旅立ちにあたつての準備には何も遠慮することはなかった。

しかし嵐が“そこ”から持ち出したものは結局、旅装束と一般の旅行者が通常用意するのとまったく変わらぬ荷物一式、皇都への旅費として通常必要と考えられるだけの金、そして術具ともなる杖一本。それだけである。

選んだ道も沙漠の道。北の「草原の道」、南の「海の道」と並ぶ三大通商路の一つであり、最も苛酷な道と呼ばれる道である。

当然他のルートにも危険は多い。「草原の道」は北方騎馬民族の勢力範囲を何度も突つ切つたり、その隙間を抜けたりする。しかもそれは時々刻々、各勢力の力加減で変わるの、昨日安全な道が今日は戦闘の真つ只中、ということもよくある話であつた。それだけならまだしも、盗賊集団に襲撃を受けることもよくある話で、大商隊が襲われて積荷が奪われ、人命が喪われるなど日常茶飯事といつてもよいくらいなのである。

しかし真冬を除けば道程にも厳しいものはなく、おおむね起伏の乏しい地域であるため、難しい旅にはならない。そして三つのルートの中で一番東西の距離が短く、吐蕃首都に直通している。それが「草原の道」であつた。

「海の道」は大陸沿いに点々と寄港しながら商売を繰り返し、最終的に吐蕃南部に辿り着く道である。南の商業都市カジャルに直通しているのはこの道だけで、当然収益も多い。また、南方にはまだ未開の地域が多く、未知の産物も多い。ゆえに一攫千金を狙う者や、手っ取り早く名のある商人として世に認められたい商人の卵にはこの道を選び、冒険をする者が少なくない。

しかし一方、陸に盗賊がいるように海には海賊がいる。また海で悪天候に出会つてしまうと、生存率は陸上よりも低くなる。

そしてまた、吐蕃に着いてからも皇都へ行くためにはほぼ吐蕃皇国を南北に縦断せねばならない。

ひとことで言つてしまえばハイリスク、ハイリターンのルートなのである。

しかしそれらを上回つて「沙漠の道」の旅は危険であると言われる。

そもそも沙漠地帯自体が人間を拒絶する。

乾き切つた大地。大地にへばりつく数少なく緑の少ない植物。天空には風塵が舞い上がり太陽の姿を乾いた色に染め変え、妙に色味を無くした、その光景。

初めてこの地のことを文献に記した吐蕃の文人はこの地を『死の世界』と呼び、詩人は世の最果てをこの地になぞらえた。

確かにこの地域にも村や町があり、人が住んでいる。しかしそれは沙漠を囲む山地の麓に、という方が正確で、山の縁が途切れた先にまで、開発の手は入っていなかった。

この沙漠地帯の「中」にあえて住もうとするのは、沙漠の民以外にはいなかった。

何故よりによつて「沙漠の道」を選んだのか、そう尋ねられた嵐は笑つて答えた。

「わしは世間知らずだからのう。吐蕃のことを知らずにこの使命をうまく果たせるとは思えぬ。わしは旅をしながら吐蕃の見聞を深めたいのだよ」

そう言つてかかと笑つてみせると、友人は疑わしそうな目付きを彼に向けた。

「嘘でしょう。君はめんどくさがりだ。それに君ほど知識のある奴はいない。君もそれを自覚している。それなのになんでわざわざ一番苦労する方法を選ぶの？」

鋭い視線で遠慮なくすけすけとものを言う友人に、嵐は笑顔を崩さずに答えた。

「おぬしはわしを買いかぶりすぎだ。それに例えおぬしの言うわしが正しかったとしても、矛盾はしておらんよ。わしは確かに知識を持つておる。しかし人の世とは疾く変わるものだ。わしはそれを修正したい。その上でわしの知識をより深めたい。どうだ？そのためには沙漠の道とはあつらえ向きではないか？」

嵐の言葉に、友人は視線はそのままに、ふうつとため息を吐いた。

「…まったく。言い出したらきかないんだから」

それなのに、と嵐は思う。

（何故こうも山ばかり事件が起こる？）

前回、禾峯露<sup>カホウロ</sup>で起こった事件は、正確には被害があったのは砂漠の村で、その犯人が山中に拠点を持っていたのである。今回も確かに彼は山に登る羽目になっているが、それとてまだ正しいかどうか、確証は無い。それにこの沙漠の道が山脈に沿って造られた村や町を繋いでいる以上、山と縁が無いわけがない。「山でばかり」と嘆くのは、単に体力のない嵐の八つ当たりである。

（　　わしはよくよく山に縁があるとみえる）

そんなことを考えて、ふと嵐は我に返った。

縁、だなど。

（そんなもの、ありえない）

嵐の口許を皮肉げな微笑が彩った。

縁だとか運命だとか天命だとか。そんな上等な、耳ざわりのいい美辞麗句は。

人間を無心に操るための方便でしかない。

小止みになったとはいえまだ雨は断続的に降り続いている。樹間の道になって生い茂った葉に雨が遮られ、大分歩きやすくなったとはいえ、時々まとめて雨滴が落ちてくるのに直撃したりして、状況的にはあまり変わっていないかもしれない。第一この数日間の雨で下草が元気に生長してしまい、獣道の両側から重くのしかかって道を覆ってしまっている。百が嵐の前を歩いて道を開いてくれているが、既に嵐は全身泥と雨と草の切れ端でどろどろになっていた。

泥に汚れるのは別に原因もあった。

「う……おっとと……！」

ずる、と足を滑らせた嵐を、前を歩く百が腕を掴んで寸前で救う。

「む、かたじけない」

体勢を立て直した嵐がいささか照れて礼を言う。

「構いませんけど……嵐さん、ほんとにニブいつすね」

あつけらかんと言う百に悪意はない。彼はただ正直なだけなのである。しかしだからといってその言葉に嵐が反応しないわけもなく。

しかし相手に悪意がない以上、怒ることもできず。

結果、嵐はぶつぶつ言いながら再び元気よく歩き出した百の後を、山道を登り始めるのであった。

実際、足下は悪いのである。嵐の腰辺りまで伸びた草によって足下は見えず、折れた草を踏まないようにすることは難しい。また、雨によって地面はぬかるんでいる。泥と濡れた草が重なり合つと、更に滑りやすくなり、それに気を遣つと今度は木の根につまずきそうになる。

百は慣れているからひよいひよいと登っていくが、嵐はそうはいかない。おまけに基礎体力も違う。

「おーい、嵐さん、がんばってくださいーい！」

無邪気に呼ばわる百に、嵐はぜえぜえと荒い息をつきながら複雑な心境で肩を竦めた。

「ときに、百よ」

「はい？」

「おぬし、何故そのようにお母上を嫌うのだ？」

無邪気に振り返った百の表情が、一瞬の内に強張る。

「何を言うんですか！」

反論の言葉は一瞬間を置いて発せられる。

「オレはお袋を嫌つてなんかいませんよ！」

真剣な表情で怒鳴る百に、嵐は平静な表情で応じる。

「そつかのう？確かにおぬしはお母上に孝を尽くしておる。他の兄弟が家を出てしまった後も、一人側に残つて、な」

「だったら……！！」

「だのに、何故、おぬしはそうにお母上を避けておるのだ？」

「避けてなんかない！」

百の反論の言葉は激しかった。その表情も厳しかった。しかしその視線だけが妙に落ち着きがなかった。

「いや、おぬしはお母上のことを避けておるよ」

ゆつくりと、百の目を覗き込むようにして、嵐が更に言う。そんな嵐の視線にぐつと喉を詰まらせてから、それでも百は頭を振った。

「そりゃ……！確かにオレはお袋の家を出てるけど！でもそれはその方がオレの仕事に都合がいいからだ！その方が仕事がやりやすいし……それはオレだけじゃなくてお袋もそうなんだ！」

「そうかのう？お母上は寂しがっておられるぞ？」

「んなわけないだろう！？オレはもう子供じゃねえんだ！兄貴も姉貴もオレぐらいのときにはもう家を出てた！お袋だってオレがいない方が仕事がやりやすいじゃないか！」

百の語調は更に激しくなっていく。浅黒く焼けた頬にも朱が走っている。

しかし対する嵐は、実のところ、冷静に見ればすぐにわかることなのだが、まったく平静なままであった。皮肉げな台詞も、少しもの見える人間であればただ煽るものであることが分かったであろう。しかし頭に血を上せてしまっている百はそれに気付かなかった。いや、もちろん、平素であれば気付いたかといえ、そうでもないであろうが。

「おぬしには分からぬかも知れぬがお母上は寂しがっておられるのだよ」

言いながら、嵐は先ほど見た百の母親の家を思い出していた。

戸口を入ってすぐが土間で、そこは作業場と厨房が兼ねられている。竈には大きな鍋がかけられていた。蓋がしてあったので中身は分からなかったが、落とし込み式の蓋が鍋の上の方にあつたところをみても、煮込み系の料理が鍋いっぱい作られていたことが分かる。

水瓶の蓋の上には泥の落とされた野菜が載せられていた。山芋と思われる細長い根菜や青々とした山菜が一山。一人分の量としては明らかに多い。

また、壁には乾物が何束も吊るされていた。これから冬になるという時期であれば冬越しの蓄えかと思うが、今は初夏である。

土間から上がったところが囲炉裏の切られた板間であり、その奥にいくつか部屋のあることが察せられた。

そこはこざつぱりと 病人ゆえに多少乱雑にはなっていたが片付けられていた。とても一人暮らしの家とは思えないほどに。

そして部屋の隅、家主の席の側には茶器が一揃い、据えられていた。おそらく、いつ訪問する者があってもすぐに応対できるよう、準備がされているのである。それは誰か、もちろん他人という可能性もある。例えば彼女を心配して薬師を連れて来た斤のようにしかし嵐はその茶器の中に、二つの非常に使い込まれた器があることに、気付いていた。使い込まれた、古い器である。おそらく十年単位で。

「お母上はいつでもおぬしを待っておるのだ。おぬしがいつ訪ねて来てもすぐに暖かく迎えることができるようにと準備をしてな。いつ来るか分からぬおぬしを、な」

嵐が皮肉っぽく笑って言う。

「そんなの、オレが頼んだんじゃねえもん」  
百がそつぽを向いて言う。

「オレだって仕事がある。別にお袋んとこにいくのがいやなんて思っちゃいねえ。ただ、オレだって忙しいんだ。まだまだオレは駆け出しで、今の内にがんばっとかなきゃあ、客をつかめねえ。今はもっと働いて、客の信用と、腕を鍛えなきゃいけないんだ。そしてたら お袋んとこなんてなかなか行けねえよ。オレは生活しなきゃいけねえんだ」

「それならお母上と一緒に住んでおってもよいようにも思うがな？別に独り立ちとは家族と離れて暮らすということではあるまい？苦

しいときに支えあうのが家族というものではないか？」

「そんな甘つちよろいこと言ってるんねえよ！それに……！！！」  
激した口調で言い募り、更にするり、と言葉がこぼれそうになり、慌てたように百が口を閉ざした。しかし嵐はそれを見逃さなかった。  
「それに…何だ？」

静かな嵐の追及の言葉に、百が観念したように俯き、呟くように言う。

「それに……お袋はオレを待ってなんかいない。お袋が待ってんのはオレじゃねえ。出てった兄貴たちだ。オレがお袋を嫌ってんじゃない」

そして更に低い声で、搾り出すように続ける。

「お袋は…オレのことなんかどうでもいいんだ」

沈黙が下りた。百は振り返らず、草の海を掻き分けてずんずんと山道を登り、嵐はその後に続いて、ややなだらかになった道を登った。

「お……！！」

しばらく登ったところでふと視界が明るくなったのを感じて目を上げた嵐が声を上げる。

「あれに見えるのがそうか？」

目の前の背中に尋ねると、半分だけ顔をこちらに向けた百が頷いた。  
「そうです。あれがお屋敷です」

その表情は少しだけ照れたようであったが、先ほどの苦しげに歪んだものではなかった。

それに頷いた嵐は、再び目を上げて木々の切れた先に見える広場を見た。

低い石組みの上に板を立てて並べた塀がぐるりを囲み、その向こうに黒ずんだ板状の瓦葺の屋根が見えている。

人が住まなくなった今でも定期的に手を入れられているためか、さほど荒廃した雰囲気はないが、やはり人の住まない家は荒れる、



との理通り、やや崩れた荒んだ印象を纏う建物であった。

「…何とも不気味だのう」

思わず嵐は率直に呟いてしまっていた。

そこは山の中腹に自然に開けた棚地のようであった。嵐たちが登ってきた道から屋敷の向こうに見える更に登る斜面まで、不自然に切り拓かれた様子がないところから、嵐はそう判断した。

棚地はちよつとした競技を行なうことができるほどの広さがあり、その中央に板塀で囲まれた屋敷があった。その周囲は今では下草が繁茂し荒れた印象を与えるが、ここに住人のいた当時はきちんと手入れがされていたのであろうと思わせた。門扉へと続く道に石が敷き詰められている辺りにその名残が見られた。

屋敷の敷地内がどのようなになっているのか、嵐には見えなかった。ただ板塀の上から覗く屋敷の二階部分と幾本か植えられた樹木の様子から、これを建てた人物、或いは建てさせた人物が吐蕃の人間であったと、嵐には推測できた。屋根を瓦で葺く建築様式は吐蕃の有力者、つまり王侯貴族や富裕な商人に特有のものであったし、庭に桃の木、或いは柳の木を植える造園方法も吐蕃の特徴を示していた。瓦の色が赤っぽいのはこの付近の砂を使って焼かれたものだからであるう。ちなみに瑠璃色の瓦が使えるのは吐蕃皇族のみ、黒いものは吐蕃の貴族のもの、丹色が宗教関係の施設に使われるものであった。瓦は有力者ののみが使うことを許されたものであり、また裕福な者でなくては購入することもできないほど高価なものであった。当然一般庶民の手の届くものではなく、彼らの家の屋根はもっぱら草や木で葺かれていた。

「この辺はお袋や斤さんたち山師が時々手入れをしてるんだ。と言つても草を刈つたり庭の木を切つたりする程度だけだ」

「それは誰ぞの依頼なのか？」

膝辺りまで伸びた草を掻き分けながら進む百の言葉に嵐が問いかける。

「うん、確か……ここに前住んでた人がうちの村の長に頼んでたらしいんだ。そんなときにいくらかお金も置いてったらしいよ。でももう随分前だろう？ そんなお金じゃ足りなくて自然とここにかかる手間暇減らしちゃったらしいんだ。だから結構荒れてるだろ」

確かにうつそうと茂った草木の中にたたずむ黒ずんだ屋敷は、廃屋寸前の気配を漂わせていた。

門前に佇んで、嵐は周囲を見渡した。そして何かを確認したように、軽く頷いた。

「嵐さん？ 入りますか？」

百が振り返る。

「おお、入ることができるのか？」

「はい、門は開いてますから……」

言いながら百が門扉を押す。蝶番がきゅうきゅうと耳障りな音を立て、雑草を掻き分けながら門扉が開いた。

「……昔はちゃんとも門がかけてあったらしいですよ。でもとつくに腐っちゃったらしいです。まあ、オレらにとっちゃあその方が色々都合がいいんでそのまんまにしてるんだけどね」

言いながら庭に入る百の後に嵐も続いた。

塀の中は建物の印象に比べれば、さほど荒れていなかった。ここ数日の雨が雑草に勢いを与えていたが、それでもここに主がいた頃はさぞ風雅な庭であったのだろうと、思わせる名残があった。

嵐は庭内をぐるっと見渡すようにし、微かに首を傾げた。そして何かを探るような視線を屋敷の方に向けた。

屋敷は塀の外から見たときとさほど印象は変わらなかった。ただ思ったよりも小さいような印象を、嵐は受けた。

建物は木造で、一部が二階になっていた。おそらく二階は一部屋分くらいのスペースしかない。その代わりに部屋の窓から外廊下に

出られるようになっており、板張りの床にぐるりと木柵が二階部分を囲んでいた。おそらく月見や花見などが催されたのであろう。これも吐蕃の貴族がよく好むものであった。雨に濡れて鈍い黒色をした屋敷は、腐ってこそいなかったが、陰鬱な空気に沈んでいた。

（気味が悪いのう）

嵐は知らず粟立った肌をそつとなでた。

「嵐さん、やっぱ鍵がかかってます。こん中に入るんは駄目みたいです」

がたがたと屋敷の入口の扉を揺らしていた百が肩越しに振り返りつつ言った。

「…しかしここまで来て調べずに帰るわけにはいかぬだろう」

嵐はきよろきよろと屋敷の周囲を見渡した。

「どこぞ開いておる窓はないかのう？それにこのくらいの屋敷ともなれば勝手口もあるだろう」

「あ、じゃあオレ、裏を見て来ます！」

言うが早いか、百が屋敷の裏手へ駆けて行った。その機敏な動きに苦笑しつつ、嵐もどこかに入れるところはないかと板戸を調べ始めた。

嵐が屋敷を四半周した頃、裏手から百が大声で嵐を呼んだ。

「嵐さん、ありましたあ！一箇所鍵のかかってないところがありますー！！」

嵐が急いで百のもとに駆けつけると、百はちょうど屋敷の真裏に当たる場所で板戸の一つをごとごとと動かそうとしていた。その戸はどうやら鍵はかかっていないようだが、建てつけが悪くなっているらしく、ごとごとと不器用な音を立てながら少しずつしか開けることができなかった。嵐はその様子を眺めながら、百が戸を壊しはしないかと密かに心配していた。

ようやく20センチほど開いたところで、嵐はふと眉を顰めた。そして慌てて袖口で鼻と口を押さえる。

（この臭いは…）

「待て、百！」

百が驚いたような表情で振り返った。どうかしましたか、と問う前に、嵐が素早く進み出ていた。そして杖を持った左手でそつと百の背中を叩いた。

「後はわしがやる。おぬしは下がっておれ」

「え、でも……」

この戸、結構重いですよ。そう言いかけて、百は言葉を飲み込んだ。そのときの嵐の表情には反論を許さないものがあつた。

嵐は戸の前に立ってそつと息を整えると、おもむろに左手の杖を戸に押し当て、そつと目を閉じた。細く長く息を吐き、吐き切ったところで、戸に当たった両手にぐつと力をこめる。後ろで見ていた百は思わず目を瞠った。嵐の左手がぼつと光ったかと思うと、一瞬にして戸全体が同じ色に光り、まるで抵抗もなかりと開いたのである。

「す」……」

(……………！！！)

感歎の言葉を吐こうとして、しかし百は次の瞬間、ひっと喉を鳴らした。数歩後ずさりしたことさえ、まったくの無意識であつた。

(……………)

背後で百が言葉を失っていることを意識しながら、嵐もまた言葉を失って室内の様子を眺めていた。

室内は荒れ放題となっていた。荒れていること自体は予想の範囲内であるが、これはそれとは少し違っていた。

戸を開けた先は狭い土間に短く細い廊下となっていて、その奥にやや広めの部屋が広がっているようであつた。奥の方までは明かりがないために見通せなかったが、壁の拡がりの様子から、嵐はそう思った。

そしてその土間から部屋に続く短い空間からして既に惨状を呈していた。

かつては白色に美しく塗られていたであろう壁は、壁土に亀裂が

走って半分以上剥がれ落ち、土間から廊下まで積もっていた。そしてその上にぶちまけたように走るどす黒い赤茶色の跡。そしてそれは壁も、天井も同様の状況であった。

「うげ……」

嵐の背後で百のくぐもった声が聞こえた。嵐も眉を顰めて袖口で口元を覆っている。

（血と　それも大量の　それから薬草、……いや、薬材の臭い。それと　腐臭？蛋白質の　。焼け焦げの臭いは無し。古い木材の臭いも混ざっておるようだな……）

嵐は臭いに敏感である。それゆえに先ほど、百が戸を少し開けた時点でこの臭いに気が付いていた。それが何の臭いか、その中の腐った血臭には気が付いたが　判断はできなかったが、それが危険な　あるいは不快な臭いであることを感知した。だから杖で自分と百に結界を張り、それでも免疫がないであろう百と戸を開ける役を交代したのである。しかしだからといって完全に内部の様子を想像できていたわけでもなく、予想以上の惨状に嵐は表情を曇らせた。

「大丈夫か？百」

振り返った嵐は、先ほどよりも十数歩離れた場所でへたり込んでいる百を見た。

「はい……何とか……」

「気分が悪いのか？」

「いや、臭いがひどかったんで……吐くほどじゃないです」

やや青ざめた表情で弱々しく頭を振る百は、とてもらしくなくて、嵐は側によるとそつと杖で百の肩を叩いた。その杖の当たったところからすうっと気持ちのよい空気が体の中に流れ込んでくるような感覚に、百が嵐の顔を見直した。

「おぬしに結界を張っておる。しばらくの間なら、体内に有害なものを取り込むことはない。吸い込んでしまったものはどうしようもないが　まあ、しばらく休んでおれば大丈夫であろう。毒気に当

てられたようなものだからのう……」

「……嵐さんは？」

「わしは建物の中を調べてくるよ。……これ、借りるぞ」

百の腰に下げられていたカンテラを借りると、嵐は安心させるように微笑んでから、屋敷の中へ入っていった。

嵐にはこの屋敷に充滿している臭いに、微かな覚えがあった。以前、沙漠の街で外法士と戦ったとき、嵐は洞窟に向かう途中の山道でこれと似たような臭いに悩まされた。あの時は今以上に杖の術を使いこなせておらず、また相当臭いにやられた後で術をかけたこともあって、危うく洞窟に辿り着く前に力尽きてしまうところであった。あのとき彼の女戦士が来てくれなかったら、相当危なかったと思う。

（また外法が関わっておるのか？）

眉を顰めながら　これは臭いのためだけではない　嵐は室内をカンテラで照らした。

そこは広めの部屋で、照明の形状や炉の形、壁にかけられた布今では引き千切られたように無残に垂れ下がり、どす黒く変色した血痕や何やらに塗れて腐っていたが　の美しい模様などから、かつては客人を迎えて語らうための部屋、応接間であったことが嵐には分かった。

しかしその後、この部屋がどんな目的で使用され、何が起こったのか　それは現在の惨状を見れば大体明らかであった。

部屋の中央付近に据えられたやや大きめの卓。その上に散乱している書物や紙片、形や大小の様々な器や皿。そして干からびたり腐ったりした草木や動物の死骸　一部は白骨化していた。それらは長い間放置しておかれたようで、埃が一面に積もって、黴たりしていた。

それは卓の上だけのことでなく、部屋全体が似たような状況で

あつた。

壁際には籠が十数個置かれていた。中身はどうやら薬材のようであつた。木の枝のように見えるものや石のように見えるものは、香料かもしれないと嵐は思った。

窓は全て板で塞がれていた。どうやら打ち付けてあるようで、開けようとしてみても、びくともしなかつた。

床中に散らばる書物や紙片、割れた器の破片、こぼれて床に染み込んだ薬液の跡、破壊されて放り出されたままの椅子。そして床どころか壁から天井まで、至る所にどす黒く跡を残す飛び散つた血痕。ふとカンテラで照らした壁に人間の手の跡に残された血痕があつたりして、大抵のことには動じない自信のある嵐も、さすがに背筋に走るものを感じていた。

まるでこの室内で乱闘でもあつたかのようであつた。否、そうとしか考えられない状況であつた。

（しかしそれにしては人間の死体がない　　）

人間の死体だけがこの部屋には一つも見当たらなかつた。しかし確かにここには人間がいたはずである。何らかの試験をしていたにせよ、集会をしていたにせよ　或いは術をかけていたにせよ、こんな跡を残せるのは人間だけである。しかし現に部屋中見回しても人間の死体も、その一部さえ見付からなかつた。壁に造り付けの棚がある以外は収納場所とてない部屋である。この部屋には隠す場所はないのである。

（他の部屋にあるのかも…）

可能性は低いとは思つたが、そう考えた嵐は屋敷内の別の場所に通じているらしい扉を開けようと手をかけた。

（……？）

ぐぐつと力を入れたが、扉は開かない。杖を当ててもう一度試してみたが、まったく動かない。どうやら他の窓と同様、打ち付けられているらしかつた。

「……………」

嵐の表情が険しくなった。じつと口元を覆ってその場に立ち尽くす。ただ視線だけが部屋中を駆け巡っている。ふと足元の千切れた紙片に目を留めた嵐は、それを拾い上げ、カンテラの明りで表面の文字を追った。文字は吐蕃のものがほとんどで、ごく僅か、ちよつとした単語などに西方のものが混じっていた。その内容を読み取って、ますます嵐の表情は曇る。

「あのー…嵐さん？」

そんな嵐を百が呼ぶ。

「おお、どうしたのだおぬし。もう大丈夫なのか？」

百は部屋の入口に立っていたが、ぎこちなく笑って、頷いた。

「ええ、まあ、何とか…それよりもこれ……」

室内を見回し、百は絶句した。

「…なんか、喧嘩でもあったんすかねえ……」

「どうやらそうらしいのう」

同意する嵐の声を聞きながら、百は薄気味悪そうに足元の動物

どうやら猫のようであったが　　を見やった。

「でも随分前ですよね…？」

「そうなのう、…この屋敷が最後に使われたのは何時のことか、わかるか？」

「いや、オレはよく知らないです。斤さんは数年前って言ってたけど　　このことやってたのはお袋たちだし、オレはその頃家を出てたし　　お袋や村長ならなんか知ってるかもしれないけど　　」

しかし彼らも内部で何が行なわれていたかまでは知らぬであろう、そう嵐は思った。

「どんな人間が出入りしていたかも分からぬか？」

「はい、オレは　　でもお袋たちも知らないんじゃないかなあ、仕事は表だけで、お屋敷の中に入ったことは一度もないって言ってたし　　」

それも確かだろうと嵐は思った。扉は相当建てつけが悪かったし、埃の積もり方を見ても、最近この部屋に入った人物のなかったこと



は明らかである。室内には嵐と百の足跡しか無かった。 少なくとも、表の入口の鍵を持っている人物がいて、表側に入っていたとしても、この部屋には入れなかったであろうと思われる。

「…嵐さん？」

百が心細そうに嵐に視線をやる。その視線を受けて、嵐は少しだけ表情を緩めた。

「大丈夫だ」

頷いてみせると、百も少しだけ緊張を緩めた。

（それにしても、やはりおかしい…）

百を不安がらせないように気を遣いつつ、嵐は思案を続けていた。何かがおかしい。この部屋には、何かおかしいところがある。

もちろん乱闘のような跡だけでも充分におかしいのであるが

それだけではない、何かがこの部屋には足りない。嵐はそんな違和感を持っていた。

もう一度、カンテラをかざして部屋中を見回す。

部屋の中央付近、炉のある側 嵐のいる場所から部屋の反対側に当たる によや寄った位置に据えられた、大きな卓。

その炉の切られた側の壁の角に二つの燭台の跡。それから部屋を半分ほどこちらに寄った側の壁の両側にやはり燭台の跡。 合計で四つの燭台の跡がある。

そして嵐と大きな卓の間には数個の椅子が散乱している。壊れてバラバラではあったが、ここが機能していた当時はきちんと並べられていたのではないか そう、嵐は想像した。二列か三列に並ぶ椅子。当然そこには人間が座る。

彼らはそこで何をしていたのか？休憩や談笑のためではない。それならば炉の側の方がよい。事実、炉の側には茶器であったと思われるものの破片もある。壊れた衝立が倒れているのもその近辺である。

向き合っていたのでもない。卓は中央付近に一つしかない。

彼らは揃って座り、ひとつところに注目していたのではない

のか？そしてその視線の先は

「百よ、ちと力を貸してくれぬか」

嵐の言葉に百が僅かに目を瞠った。

「も、もちろんです。でも何を？」

気味の悪そうな表情でちらりと部屋中に散らばっているものに目をやった百に、嵐は安心させるように頭を振った。

「いや、ちと壁を剥がすのを手伝って欲しいのだ」

「へ？壁？どこの？」

「これだ」

そう言つて嵐は今まで彼が背にしていた壁を示した。

百の持参していた手斧で壁を剥がすことになった。

最初に斧を入れた時点で百はそれが随分と薄いことに気が付いた。思い切り打ち込んだ手斧が急に手応えを無くして、百は危うく手を滑らせそうになったりした。

百が打ち壊した壁板の破片を拾い上げた嵐は、それが随分と薄い、安っぽい板であることを確認した。明りが乏しいため、先ほどまではよく分からなかったのだが、その壁は明らかに他のところとは違っていた。それによく見ると、その壁だけ、血痕が無かった。足下をカンテラで照らして、嵐は壁と床の境目で血痕が不自然に途切れているのにも気が付いた。それらを確認して、嵐はますます自分の考えが正しいということを確信していた。

「嵐さん……！！」

壁に大きな穴が開いたところで、百が嵐を呼んだ。興奮した口調である。嵐はカンテラで照らしながら穴の奥を確認し、頷いた。

「やはり……」

そこには祭壇が設えてあった。

相当高さも幅も奥行きもあったが、もとは壁に造り付けの棚であったのだろつ。真中に何かの像が置かれ、左右にずらりと燭台が並

べられている。

もつとも、この祭壇らしきものもこの部屋のほかの部分と同様、相当破壊されていた。

像はどうやら木製らしいが、肝心の首が落ちてしまっていて、それがどのような姿をしていたのか、判別し難かった。一つだけ言えるのは、現在の吐蕃ではあまり見ないものであるということであった。

燭台は壊れてなぎ倒されたようになっていたが、金属製の、高台型で、華美でない程度の装飾が施されていて、吐蕃の祭具にも似ていた。また吐蕃の吊り下げタイプの燭台も落ちて壊れた状態であるのが数個あり、それら全部に火を燈したら相当煌びやかになったであろうと嵐は想像した。

その他には書簡や器に盛られた供え物らしきものの残骸 腐り切っていて、原型は判別不可能であった。そして金属製の湯飲みのような形のものが数個。

それら全て、血痕や埃、黴にまみれていたが、中に血痕とは違う染みがあることに、嵐は気が付いた。

黒ずんで、ねっとりとした固体がこびりついている。そこだけ埃が目立っていることから、嵐はそこにこぼれていたものは油のようなものではないかと推測した。そしてその固体は

「嵐さん、これって」

百が眉を顰めながら声を潜めた。

「うむ」

嵐は頷いて、それにカンテラを近づけた。

黄褐色のねとねとした物体。表面だけは乾燥したように結晶が浮かんでいる。

嵐は懷から包みを取り出して中身をその結晶と見比べる。

「間違いないな」

嵐の言葉に百も頷く。

包みから取り出されたのは苔の生えた木切れ。その苔には薄黄色

い結晶がこびりついている。百の母親の家で、先ほど嵐が見つけたものである。それは祭壇に残された黄褐色の物体と同じものであった。何より臭いが同じであった。

百が完全に壁を壊し、祭壇がはつきりと現れた。

「やはりな」

嵐は祭壇から部屋へと視線を移しながら、確認するように頷いた。それから百を促して屋敷を出ると戸を閉め、封印をどこした。

結界を施していたとはいえ、完全に毒気を遮断できていたわけではない。それもあって早々に屋敷を後にした二人であったが、屋敷が木立に隠れるくらい離れたところで休憩を強いられた。嵐には今回の事態に対して多少の予測があつたし、また多少の免疫もあつた。しかし何の予備知識も免疫もなかった百が、相当疲労していた。嵐にしても基礎体力が弱いので、百が休憩をしようと提案したとき、まったく異論は無かった。

百が持参してきていた水筒の水を分け合つて飲み、一息ついた頃、百が嵐に恐る恐るといった風に問いかけた。

「嵐さん？…あの、訊いてもいいですか？」

「何をだ？」

しれつとして答える嵐に、百は一瞬口をつぐんだが、結局続けた。

「さっきの…あれ、何なんですか？あそこで何があつたんですか？」

嵐は表情も変えずにじつと遠くに目をやっていたが、おもむろに口を開いた。

「それは難しい問いだのう。わしとて全てが分かつておるわけではないし…特にあれは推測するしかないことだしのう…」

めつたなことは言えんよ、と笑う嵐に、百は急に激した声を上げる。「だって変じゃないっすか！あそこって貴族サマのお屋敷だったんっすよ！昔はとってもきれいなお屋敷で、貴族サマもいい方で、だ

からうちの村長やかあちゃんたちがずっと来ない貴族サマのためにここをきれいにしてたんすよ！それなのに…なんなんだよ。気味が悪いよ……」

ぶるつと百が身震いをした。太い二の腕をさすりながら、じつと地面の石ころを睨みつける。

そんな百の様子を眺めやりながら、嵐はやはり口を閉ざしていた。「かあちゃんはさ……」

おもむろに百が語りだす。

「ずっと…今と同じ、貧しかったけど、でもかあちゃんはいっつもにこにこ笑って、すっげえ元気で…とうちゃんが死んじまってからもずっとずっと働いてた。それでオレら全員、かあちゃんが育ててくれたんだ。8人だぜ、8人！すっげえよ……」

突然語り始めた百を、嵐はじつと見つめていた。どこかぼんやりとした焦点のぶれたような瞳で、じつと耳を傾けていた。それを知ってか知らずか、百の独白は続く。

「でもさ、やつば…うちは貧乏だったよ。大喰らいが八人もいたんだもん。ああ…とうちゃんもすっげえ食ってたような気がする。おっきかったし。オレ、ずっととうちゃんみたいにでっかい男になりたいって、とうちゃんみたいに強くなりたいてって思ってたよ。だから負けないように喰ってた。とうちゃんの真似して木い切ろうとして指切っちまって血いだらだら出たけど絶対泣かないってうち帰ったらかあちゃんに叱られちまったり。でもなんか…嬉しかった。その後とうちゃんが鉈くれたんだ。指切り落とさねーように練習しろって。だからかな…」

でもさ、兄貴たちは貧乏はやだったんだ。とうちゃんかあちゃんに言ってんの聞いたことがある。

『こんなとこでいつまでもいたってだめだ。もつと都会に、都とかに行っで商売したらもつと儲かる。そうすべきだ』って。

でもかあちゃんが行かないって言ってた。とうちゃんは…何て言ってたのか覚えてないけど。で、それから少しして兄貴たちは町に行

って商売するって出て行っちゃった。

そんな時、ほんとにはオレも誘われてたんだ。まだちっこかったけど、お前は体がでかいし馬鹿力だから、きつと町に行ったらいい仕事が見付かる。一緒に行こうって。でもオレ、行かなかった。姉ちゃんがお嫁に行ったときも、三兄と四兄も家出て商売しに行っちゃったけど、でもオレは行かなかった。結局今もずっとオレだけ残ってる」

嵐は視線を百から外してじっと目の前の木を見つめた。堰を切ったように後から後から続く百の独白は、嵐にとっては別世界の物事のようにあつた。

「かあちゃんはさ、ずっと待ってたんだ。兄貴たちを。とうちゃんが死んじゃってからもずっとあの家に一人でいるのはそのためなんだ。兄貴たちは出て行っちゃってから全然どうなっちゃったかわかんねえ。姉ちゃんや妹たちはまだ近いからいい。ちょっと川越えりやあすぐに会える。でも兄貴たちはわかんねえ。……商人について行った兄貴たちはまだ、いいんだ。でも吐蕃に出て行った兄貴たちがどうなったのか……かあちゃんはいつとも気にしてる。時々村に下りてくるのは便りが来てねえか確かめるためだし、一人になってもあの家を出ねえのは兄貴たちが帰ってくる場所がなきゃだめだからなんだ。全部……全部……」

「母上は……」

嵐がそつと口を開く。

「お母上はとても情の深いお方なのだな」

百が首を回して嵐を見た。嵐は視線を前方に向けたまま、百が何か言う前に、続ける。

「お母上はのう、ずっとずっと、母親なのだよ。」

母親であることは並大抵のことではないぞ。何と言っても命が身一つのものではない。母親にとっては子供はいつまでも子供だ。子が子であることを否定しても母親は母親であることを決して否定はできぬ。何故ならば子に母から生まれた記憶がなくとも、母には子を産んだ記憶があるからだ。

わしとて男であるから知っている

わけではないが　子を産むことは心身ともに大変なことであるそうだ。子を産むことで命を失うものも少なくない。言葉通り、命をかけて子を産むのが母親というもののなのだ。いわば命を分けたといってもよい。

そのようにした存在を、忘れることができるであろうか？ いや、それは決してありえない。

そのような存在を、愛さないということがあろうか？ いや、それはありえない。その存在が例え愛を否定しようとも、例え他人には分からなくとも、理解できなくとも、どのような形でも、子を愛さぬ親はないのだ。

お母上も、そうなのだよ、百。おぬしのお母上は今でもずっと、“母親”でいたいと思っておられるのだ。自分の愛する子供たちにとって。それはおぬしの言うように、兄君に対してもそうであろうし、百、おぬしに対してもそうなのだよ。ただ、目の前におぬしがいるから、口には出さぬだけなのだ。

そなたのお母上は、おぬしのことを大層大事に思っておられるよ」嵐の言葉に百はしばらくぱくぱくと口を開閉させていたが、やがて肩の力を抜いてうなだれた。

「…わかんねえ。オレ、難しいことは」

「うむ、わしもだよ」

百の言葉に嵐も苦笑交じりで答える。

「わしは男だからのう。これは女でなくば真に理解できぬ心地であろうと思うぞ」

言って、嵐は百に視線を向けた。

「ところで、百よ、おぬしの“ハク”という名、このような字を書くのではないか？」

言いながら、嵐は拾った小枝で地面に“百”の文字を書いた。視線を上げた百が、頷く。

「うん、そうだけど…嵐さん、よくわかったすね」

「まあ、それくらいは、のう…しておぬし、この“百”は何を意味

するか、知っておるか？」

「え、いや……」

百が眉間に皺を寄せて嵐を見た。

「……これは数を意味するって、誰かが言ってた。おっきな数を意味する文字だって」

「その通りだ」

百の答えに、嵐は頷いた。

「ときに、この名は何方がつけられたのだ？」

「とうちゃんとかあちゃんだよ。とうちゃんは頭のいい人だったんだって。商売人で、たくさんのことを知ってた人だったらしいんだ。オレは覚えてないけど。かあちゃんの由杏<sup>ユアン</sup>ってのもとうちゃんがつけたらしい」

「ほう……」

嵐はうなづいた。

この時代、字を使いこなせるのは特殊な教育を受けた上層階級の人物か、あるいは商売人、それも上流階級の人間とも取引をすることもある者にほぼ限られていた。

例えば百のような典型的な庶民に生まれ、生きるために仕事をする者にとって、文字とは大した意味を持たないものである。人によつては一生縁がなくても、何ら問題のない場合もある。

つまり、百の父親は、それがどの程度の知識であったのか、現在では測りようもないが、文字を使えるという時点で、なかなかの教養を持った人物であったということができるのである。

「でもオレやだ、“百”って名前。なんか適当で」

百のすねたような口調に、嵐がくす、と笑ってみせた。

「おぬし何か余計なことを聞かされておるようだのう」

その言葉に百がぴくりと肩を震わせた。

「おぬしの聞いたことはおおよそ見当がつく……だが、のう、百よ。それは誤解であろうと思うぞ。」

“百”の字を名前として用いるときにはのう、それは“数え切れ



ないくらいたくさんあること”を転じて、“何よりも大切なもの”という意味となるのだよ。数え切れないほどたくさんあることは、幸福につながる。ゆえに“愛しいもの”へとつながるのだ。決して数え切れないほどたくさんあるうと、嫌になることはない。そうではないか？”

百がじいっと穴の空くほどに嵐の顔を見つめる。

「おぬしは、確かにお母上の、そしてお父上の愛情をいっぱいにかけておるのだよ、百。今はまだあまり実感できてはおらぬかも知れぬがな」

その言葉に、百は再び膝に顔を埋めてしまった。その肩が時折ぶるぶる、と震えているのを、嵐は穏やかな瞳で見守っていた。

「……わかんねえよ、オレ。わかんねえ」

「……そうだな」

## 5・秘密と疑惑

「由杏<sup>ユアン</sup>殿の病気、これはある薬物による中毒症状であったのだ」  
黄瀬の村長の家で、嵐はそう切り出した。

山上の屋敷から戻った嵐と百は、まず百の母親、由杏の家で事情を説明した。その思いもかけない内容に驚いた由杏と斤が、このことは是非村長にも知らせなければならない、と嵐を村長のところまで連れてきたのである。嵐としては百も同じものを見てきたわけだから、彼が説明すればいいし、本当に事情を確かめたい人間は現場に足を運べばいいと思っただけなのだが、

「オレにちゃんと説明できるわけじゃないじゃないですか」

と百に主張され、その上由杏も斤も沙漠の薬師も、一緒にもう一度村長と一緒に事情を聞きたいと言い出してしまい、極めつけには沙漠の薬師の

「どうやらあの屋敷の詳しいことは村長様が一番詳しいようですし、彼に話を聞く必要があると思いますよ」

という言葉に、嵐自身の好奇心も刺激されてしまった。そんなわけで嵐は現在二度目の事情説明を村長の家の執務室で行なっているというわけなのである。

室内に居るのは嵐、村長、百、百の母親の由杏、斤、そして沙漠の薬師であった。由杏はまだ体が完全には治っていなかったが、薬師の処方した薬のお陰で大分具合が良くなっていた。完全な治療薬も、嵐が屋敷から持ち帰った黄褐色の結晶を既に薬師に渡してあるので、それを分析して、直にできるであろう。

「薬物？薬物とは…一体どのような…」

唯一この場で初めて嵐の話を聞く村長が尋ねる。

「それはまだはつきりとはわからぬ。これから薬師殿が詳細な分析

をしてくださるであらう」

嵐は砂漠の薬師に視線を向けて頷くと、言葉が続けた。

「しかし薬物中毒とは穏やかではありませんな……」

眉を顰めて村長が唸る。

「いや、この場合、由杏殿は自分でもそれと知らずに薬物の毒性にあてられ続けておったのだ。毒物の出所はあの山上の屋敷だ」

しかし嵐はそんな村長に優しい、しかし断固とした口調で答える。

嵐は由杏の家にいるときから空気に澱みを感じていた。それはごく僅かなものであり、普通の人間には大して気にならないレベルのものであった。

であるから百も斤も何度もこの家に入出入りしているのに何にも異常を感じることがなかったのである。またそれが、彼らが空気の澱みに慣れてしまっていたからではないという証拠には、初めてそこを訪れた砂漠の民の薬師も何も異常を感じることがなかったという事実がある。

しかし嵐は人一倍感覚が鋭く、特に嗅覚は鋭い。先だつての砂漠の街での蝙蝠襲撃事件のときのように、鋭すぎる嗅覚が時に仇となるほどである。であるからこそ、空気の澱みに気付き、またそれが有害なものであるということに気が付いた。そしてそれがこの場所で発生したものではなく、どこか別のところからもたらされたもの、例えば風に乗ってどこかから吹き込んできたものではないか、という感覚を抱いたのである。

「この辺りでは普段、風は西から東へと吹いているのではないか？」

「ああ、そうです。砂漠の風は西の方から東へと吹き続けておりますし、南の山から吹き下ってくるものもありますが、それは一年の内で何度かしありません。山の風も西からのものですね」

「ああ、そうそう。山の風は砂漠ほどではないが、いつも沙南の方へ吹いていきますなあ」

「その風が問題であつたのだ。由杏殿のお住まいはあの屋敷を通る

風が吹き下る場所にあつたのだ。そのためにあの屋敷から発生した毒物が風に乗り、由杏殿のお住まいの辺りに吹き込んだ。

それはもちろんほんの微量ずつではあつたろうが、確実に人体を蝕むほどの量が流出しておつたのであろう。屋敷の近くで仕事をしていたことも症状を重くした要因であらうな。

ここ数日症状が治まっていたというのは、雨が降っておつたせいだ。雨が屋敷からの毒物の流出を阻み、新たな毒物に触れることもなかったために由杏殿の体調が正常に戻りつつあつたのだ」

黄瀬は沙漠の村であるから、年間の降雨回数は極端に少ない。大体年に数日の雨期に一年分まとめて降る。その他はたまに思い出したようにばらばらと地面が湿る程度降るくらいである。つまり基本的に黄瀬は乾いた土地柄なのである。

そしてほとんど降らない雨とは反対に、風は年中やむことなく吹き続けている。それは普段は黄瀬に恵みをもたらす。

しかし今回、やむことのない風は見えない毒を流し続け、対して人々の生活を脅かすかに思えた異常な長雨は、その風を一時的に抑えて毒の流出を食い止めた、ということになる。

嵐の語る言葉に室内の全員が耳を傾けていた。

「しかし……」

ややあつて村長が首を捻りながら嵐に視線を向ける。

「そもそもどうして、毒物などがあの屋敷に存在していたのでしょうか？」

その言葉に全員が嵐に改めて視線を向ける。そのことはまだ嵐は皆に説明していなかったのである。

「あの屋敷は昔、さる貴族の方が別荘として建てられたものです。建てられた当時は一年に一度、数日間休暇を過ごすために使われていました。その頃はこの村の者が使用人としてお仕えして、時には私も客として招かれたりもいたしました。その頃は本当に普通の別荘でしたよ。　　こんな田舎でございますから、なにぶん、派手な

ところではございませんでしたが。それでもかの方の趣味の良さとお人柄がうかがえる、居心地の良いお宅でございました。それなのに、一体――

「その貴族さまが、その……毒物を……？」

村長の言葉を受けて斤が言い難そうに問う。

「いや、おそらく、その、元の持ち主である貴族殿は関係ないのではないか。断言することも、わたしには今できぬが――」

嵐は困ったような表情で、それでも彼らの不安を煽ることがないよう、言葉を選んで答える。

「あの屋敷にはそうたくさん部屋があるわけではなさそうだし、何より問題の部屋は一階で一番大きな部屋であつた。おそらく居間か応接間。客が来て隠せるほどの規模でもない。ゆえにその貴族殿が使われておつた頃に何かが行なわれておつたとは考え難い。むしろその後にあの屋敷を使用しておつた者が、わしは気になる」

「え、でも、あの屋敷はずっと貴族サマのもんなんでしょう？」

百が誰にというわけでもなく尋ねる。

「いや、名義上は今でもその貴族殿かもしれぬ。しかしここ数年はその者は来ておらぬというようなことを聞いたが？」

嵐の問いに村長が頷く。

「はい、確かに。やはりこのような辺鄙な村では不便なことも多いでしょう。ここ数年　と言つても4、5年前に来られたのが最後だつたかと記憶しております」

「それでその後、誰ぞ別の者が使つておつたとか？」

「ええ、よくご存知ですね。2、3年前のことでしたか、沙南の貴族の使いだという者があの屋敷をしばらく使うと申ししてきました。断る権限など私にはありませんし、貴族さまの了承はとつたのとで書類も確か持つてこられましたので、鍵を渡しました。もし何かあれば貴族さまにお知らせすればよいことですしな」

「書類？」

「ええ、屋敷を使用するにあたり鍵を渡してほしい、というような

もので、貴族さまの印が入っておりましてので、大丈夫だろうと思つたのです」

「ふむ。それで、その者たちはどのようなものであつたのか、覚えておるか？」

「いえ…特に。大して話もしませんでしたし。ですが見るからに怪しい、ということはありませんでしたよ。愛想はなかったですがね」

「その者たちは沙南の者であつたのか？」

「そうだろうと思います いや、そう思いました」

しかし沙南は吐蕃の一都市であり、民族的にも、混血種が多かったり、異国人が多かったりということはあるが、基本的には標準的な吐蕃人の姿 つまり、黒っぽい頭髪、白よりも黄褐色に近い肌色、ややがっちりした体格、といった姿 をしている。特に特徴があるわけではない。服装も、沙南に定住している者なら吐蕃の標準的な物を身に纏っている。

反対に言えば、怪しまれなくては吐蕃の標準的な姿をしていればよい。無闇に人を疑うような人間でなければ、それで何の問題もない。

「それで…その者たちが屋敷で何をしておつたとかいうようなことは…」

村長は頭を振りながら答える。

「いえ、その方々とはそのとき会つただけですから。 あ、いえ、何度かは鍵を返しに来られましたか、それだけです。 会話というものもありませんでしたし」

「そうか…それで、最後にあの屋敷が使われたのは？」

その問いに村長は困つたように首を傾げた。

「いえ、はつきりとは解りかねるのです。確かに最初の何度かは鍵を返しに来られました。しかしその後全く姿を見なくなつてしまつたものですから」

「 由杏殿、斤殿、おぬしらは…？」

嵐の視線を受けて、由杏が頭を振つた。

「いえ、その、確かに何度かあの屋敷の中に人がいるのを見たことはありましたが、何しろあの塀があるでしょう？それにずっと雨戸も閉まったままでしたし。貴族さまが来られなくなっただけなら庭の中までお手入れすることも段々やらなくなっていきましたし…それにねえ、なんか不気味で、あそこ。だから何となく近寄らなくなっちゃったんですよ」

「物音も聞かなんだか？」

「ええ…」

由杏の言葉に斤も頷く。嵐は顎に指を当ててじつと視線を彷徨させた。

しばらくの沈黙を、百が破った。

「一体、あの屋敷では何があったんですか？あんな…あんなの、フツウじゃない」

そして先ほど見た光景を思い出したように表情を曇らせる。部屋中の視線が一斉に嵐に注がれる。

嵐はまだ迷うような表情をしていたが、ややあつて一つ首を振ると、自分の推理を話し始めた。これはあくまでも自分の推理ではないが、としっかりと前置きをしていたが。

「つまりだな、簡単に言えば、あの屋敷では何やら物騒な研究が行なわれておった、ということだと思うのだ」

「物騒な研究、ということ」

問いに、嵐は内心答えを迷った。しかし結局は率直に思うことを答えることにした。

「もちろんその研究の詳しい内容までは断言できぬ。しかし一つだけ、確信しておることがある。それはあの屋敷で行なわれておった研究は、“術”の研究であるということ。それも“外法”の術だ」「げ…外法！？」

嵐が静かに落とした爆弾は、確実に部屋全体を震撼させた。百も砂漠の薬師も村長も、嵐以外の人間全てが顔を強張らせて血の気を

引いた顔を見合わせる。

「そ、それは何故…何故、外法の術だとあなたは確信しているのですか？」

村長が乾いた唇をぎこちなく動かして嵐に尋ねる。嵐は薄暗い室内で燭の灯りに照らされた陰影の深い表情を僅かに顰めながら答える。

「それにはいくつか理由がある」

嵐は薄暗い室内で燭の灯りに照らされた陰影の深い表情を僅かに顰めながら答える。

「まず…室内の様子だ。窓や扉は全て閉ざされ、外光が入らぬようになつておつた。どういうわけか外法を行なうときは外光が御法度なのだ。代わりに人工の光を用いる。それにも制約があるということだが、詳しいことまでは知らぬ。

それから部屋の中だが、真中に大きな卓が据えられておつた。そして術に関する書物、薬材に関するもの、調薬の道具、そして香。

その状況は、実はわしは以前似たようなものを見たことがある。そこでは外法士が違法な術を行使しておつたのだ。だから、ほぼ断言できる。あの部屋は外法の研究室として使用されておつたのだ。

それに決定的に、あの部屋を使用しておつた者たちが外法の信奉者であつた証拠がある。祭壇だ」

「あ、あの、壁を壊したところにあつた…」

百の言葉に嵐が頷いた。

「そうだ。あそこにあつたのは外法の祭壇だつたのだ。わしも

実物はほとんど見たことがないが、以前読んだ書物に大体のことが書いてあつた。

外法を行なう者は日に何度か闇の神に祈りを捧げねばならぬ。そのための祭壇には最低限備えねばならぬ基準がある。まず闇の神の像を真中に。その左右に燭台を三対。もつともこの数は諸説あるようだが。そして神への供物を捧げる台。香油を入れる器が一对。そして香台だ。



彼らは燭の灯りと香を焚くことだけは欠かさぬのだそう。中でも香は一番重要なもので、調査にも厳密な決まりがあるそう。

それで、その香がこの場合は重要なのだが」

「香：もしかして……！？」

薬師がはつとしたように声を上げた。嵐が頷く。

「そう。外法の神に捧げる香には、一種の麻薬作用があるのだ。単純に言えば恍惚状態にする作用があると言われる。」

ここからは完全に推測でしかないのだが、彼らの行なっておった研究は、いや、外法の術は失敗したのである。その結果があの部屋の惨状だ。あの血痕から見ても人命も失われたに違いない。その為にあの部屋は閉めるしなくなってしまった。しかしあそこを完全に片付けることもできなかったのである。或いは後日再び術を再開する目的であったのかもしれないが、あ

の部屋は閉ざされた。

その際、外法が行なわれておったということになるべく公にしなければならぬ。明らかな外法の証拠である祭壇の部分は、隠された。後で改めて調べればはつきりするが、あの祭壇を隠しておった部分だけは、壁に血痕がない。惨劇の後であの壁が造られたという紛れもない証拠だ。

幸い、中で行われておったことも、あそこで何らかの惨劇があったことも、誰にも知られておらぬ。屋敷を閉ざして姿をくらませれば証拠などありはせぬし、怪しむ者もおらぬ。現に、今まで誰もあの屋敷を怪しむ者はおらんかった。幸い、この辺りは乾燥した土地柄であつたゆえ、中に残されたものが腐敗しきつてしまふ、ということもなく、流された血もほぼ乾燥してしまったのだらう。いくら腐敗臭はあつたが、状況からすればはるかにましな方であつた。

しかし研究を止め、屋敷を閉ざしたといつても完全に密封されておつたわけではない。それにこの辺りは乾燥した土地柄だ。部屋の中に残された薬材や香の何種類かは乾燥し、空気中に成分を放出し

た。それが屋敷の外にまで漏れ出してしまい、風に乗って麓まで運ばれてしまった　と、そういうことだ」

「しかしなぜユアンばかりが被害を受けたのでしょうか？」

「それは風の流れる先が不運にも由杏殿のお住まいの方であったということだ。」

大体風の向きというのは年中決まっておる。　沙漠の中まで入れば違うという話だが　大体、風というものは西から東へ流れる。特にここのように高い山がある場所では南北からの気流が山に遮られ、東へ方向を変える。

由杏殿のお住まいは正確にはこの村の南というよりは、南東にある。

ちょうどこの黄瀬の辺りで沙漠の南の山脈　碧透山脈ヘキトウは切れて

川へと下る。その東側斜面に、ちょうど件の屋敷と由杏殿のお住まいがあるのだ。そしてその先はまっすぐ川に続いておる。つまり、位置的に見て、屋敷から毒物を含んで山を吹き下りる風は黄瀬にほとんど流れ込まぬのだ。流れ込んだとしてもほんの微量。それくらいでは発症せぬし、他の物質に紛れて中和されたということもあつたかもしれない。川に流れ込んだとしてもここより下流にしか被害は及ばぬ。それ以前にやはりそのくらいでは発病には至らぬのである。　完全に無毒化されておるかどうかは分からぬが。

それに由杏殿のお住まいの辺りはちょうど空気が溜まりやすい地形なのだ。それが由杏殿だけが発症した理由であろうとわしは考える」

その後、二、三の話し合いが行なわれたが、結局それ以上のことは後日にでも沙南の役人に報告して捜査してもらうのがよいという結論になった。

それから2日後、ようやく水量の落ち着いた川を村長の使いが沙南へと渡った。使いが戻るのは早くて5日後であろうということであらうとも嵐が黄瀬を旅立つのは早くて一週間後ということになっ

た。沙南の役人に改めて説明をする人間が必要であつたからで、それに最も適しているのは嵐であると村長以下全員の意見が一致したのである。そう言われては、さすがの嵐も逃げることはできなかった。

「それにしても嵐さんって不思議な人だねえ」

由杏が糸を繰る手を休めながら言った。

「偉い人だろ？嵐さんって」

百が仕事道具の手入れをする手を止めて母親を振り返る。その表情はまるで我がことのように誇らしげである。

「ああ、偉い人だね」

由杏がそんな息子をおかしがるような目で眺めて、頷く。

由杏は現在、百の家に移っていた。

例の屋敷は嵐が封印したが、何と言っても見えない未知の毒物である。とにかくこの場所は離れた方がいいということになったのである。百の家で、薬師の治療を受けながら静養するようになって数日。由杏の症状は少しずつ改善していた。

現在では寝床から起きることもできるようになり、激しく体を動かすようなことを控えていれば、仕事もできるようになっていた。

「オレさ、あんな偉い人初めて見たよ！何でも知ってるし、すげえ何でも分かつちゃうんだよな。ソンケーしちまうよ。あんな人を…なんだっけ？『ケンジャ』…って言うのかな？」

「薬師さまが言っていたのかい？」

由杏の言葉に百は照れくさそうに頷いた。

「薬師さまもさ、すっげー偉い人だと思うんだけど、何ていうのかなあ…何か、ちょっと違った感じで　すごい偉い人だって思う」

「ほんとにねえ。まだあんなにお若いのに」

「…ほんととはトシだって言ってたけどさ」

「でもまだお若いよ」

由杏がおかしそうに瞳を細めた。

確かに嵐の年齢は百よりも随分上であつたが由杏から見ればまだまだ若者である。それなのにその年齢であんなにものが分かるなんて、ほとんど不思議としか言いようがない、とまで由杏は思つのである。一体どのような経験を積みればあんな目ができるのだらう、そう由杏は思つ。

「…ねえ、ハクや」

由杏の口調がふと変わった。百は不思議そうな表情で振り向く。そして由杏の表情の真面目さに戸惑つた。

「ねえ、ハク。おまえ、もう15歳になるのね」

唐突な話題の転換に、百は更に戸惑いつつ、頷いた。

「おまえももう充分大人なのよね。だからね、ハク。やりたいことがあるのなら、やっていいのよ。行きたい所があるのなら、行つてもいいのよ。わたしのことは構わずに」

由杏の言葉に百は思わず手のものを取り落とした。

「え、それは…そんなことは、オレ……」

「おまえは優しい子ね、ハク。兄さんたちが出て行ってしまった後も、おまえはこの村に残っていた。妹たちの世話もよくやってくれた。あの子達がお嫁に行ってしまった後でも、おまえはここに残っている。わたしの仕事も随分手伝ってくれた。本当におまえはいい子で、わたしはおまえのことは何にも心配することがなかったよ。これまでもずっと」

由杏は優しい声で語り続ける。百は知らず姿勢を正して母親と正対していた。

「兄さんたちは貧乏がいやだって、とつとこの村を出て行ってしまった。今のおまえよりももう少し幼かったかねえ。ちょうど吐蕃から働き手を探しに来ていて、それについて行ってしまった」

「覚えてるよ。それに　あの時、本当は、兄貴たちはオレも誘つたんだ」

「ああ、知っているよ。でもおまえは残ったね」

由杏が頷くの、百は驚いた。母親がそのことを知っているとは思わなかったからだ。

「わたしはあの時胸が張り裂けそうだったよ。何と言ってもあの子どもたちはまだ幼かった。体は今のお前よりも大きかったけど、無謀で、きかん気で……でも、いつかは子どもはいなくなってしまうもんだからね。それが少し早まったただけだと思って、我慢した。確かに町に出た方が仕事もたくさんあるからね。それであの子どもたちが立派になれるんなら、それでいいと思った。」

おまえの三人の兄さん姉さんもその後次々と村を出て行った。あの子どもたちはまだいいね。どこにいるか分かっているもの。何をしているのかも時には便りを与える。でもね、心配なんだよ。やっぱり今じゃ立派な商人さまに山師、おかみさん。それでもかあちゃんにとってみればね、あの子どもたちは子どもなんだよ。いつでも心配なんだ」

由杏の言葉を聞きながら、百は嵐の言葉を思い出していた。

『お母上はのう、ずっとずっと、母親なのだよ』

ああ、そうか。こういうことなのかなあ、そう、百は思っていた。

「だからね、あんたがこの村ですっと仕事をしてるの、本当はすごく嬉しいんだよ。時々顔を見せに来てくれるし、ご飯だって食べさせてくれるねえ。それはあの子どもたちにはしてあげられないから。」

その分も含めて、おまえが来てくれるのが本当にわたしは嬉しいんだよ。

でもね、だからこそ」

そこで由杏は口を閉じた。一つ、二つ、息を吸う。

「だからこそ、ね。おまえは我慢することは、もうないんだよ」  
思い切ったように言って、そして由杏は百に穏やかな目で笑いかける。

「わたしはおまえの優しいところに甘えちゃってたね」

「そんなことは……そんなことはないよ、かあちゃん」

百が戸惑ったように口籠もる。しかし由杏は百が『お袋』ではなく『かあちゃん』と呼んだことに気が付き、ほんのりと心が温くなるのを感じた。

「ハク。おまえの名前、おとうさんが付けてくれたのよ…覚えている？」

「へ？」

突然話題が変わったことに百は間抜けな声で答えてしまう。一体今日のかあちゃんはどうしたのだろう、と頭の中は疑問符だらけである。

「おとうさんは賢い人だったから。文字もたくさん知っていたし、勘定もできた。かあちゃんもよくは知らないけど、昔は商人をやっていた、遠い国で修行を積んだ人だったんだよ」

「うん、ちよつとは覚えてる。よくいろんな国のお話してくれた。

オレ、それが一番好きだった。山の中で飯食いながら色んなこと話してくれた。ほとんど覚えてねえけど」

「そうだね。かあちゃんもそれが好きだった。かあちゃんはこの村で生まれてほとんど外に出たことなんてないから、だからよけいにあの人の教えてくれる色んなことが本当に珍しくて、楽しかった。かあちゃんの名前、付けてくれたのもお父さんだったんだよ」

「え？かあちゃんのか？」

「ああ。文字を覚えてくれた。

それまで「ユアン」って呼ばれてたけど、それがどんな意味なんだか、どういう字を書くんだか、知らなかったし意味があるなんてのも知らなかった。

でもおとうさんがね、文字をくれたんだ。「由杏」花の名前をくれたんだ。春に咲くかわいいお花だって。いつか見せてあげるよって。結局、それは叶えてくれなかったけどね。

でもね、すごくうれしかった。わたしの名前に意味があるってことも、それがかわいいお花だっていうのも。

ハク、おまえの名前は「百」。たくさん子どもが生まれたよ。で

もおまえの一つ上の子どもは産まれる前に死んじまった。かあちゃんはずごく悲しかったよ。

でもその次の年に産まれたのがおまえ。ほんとうに嬉しかった。これがまた、おとうさんに似ておっきな元気な子で。涙が出るほど嬉しかった。そしたらおとうさんが、

『この子どもはほんとうに宝物だね』って言って。それを一生忘れないように、『百』という名前をあげようって。

「百」っていう文字にはね、数ですごくたくさんのことって意味もあるから、それで“数え切れないくらいたくさんある大切なもの”っていう意味があるんだって。将来はものをたくさん持てる人にお金持ちになつてもらいたいって、そんな願いもあるって、おとうさん言つて笑つていたよ」

由杏が懐かしむように笑う。百はそれを見ながら、目が熱くなるのを感じて、必死にこらえていた。

『おまえなんか山ほどいるきょうだいの一人じゃないか』

昔けんか相手にそんなことを言われて、悔しくて、滅茶苦茶に相手を殴ってしまった。そんな記憶がぼつと嵐の心に浮かんた。その後のことはよく覚えていないけれど、怪我をして泣いてしまった相手の親に母親がぺこぺこ謝って、その後でこっぴどく叱られたような気がする。色々な意味で思い出したいくない記憶であつた。

しかし今は少しの気恥ずかしさを感じるだけで、あの頃のように深刻な憤りは感じない。

『「百」はたくさんの中の一つじゃなくて、「すごく大切なもの」』それを母親の口から聞いて初めて、百は「百」という自分の名前に誇りを持てたような気がしていた。

『おぬしは、確かにお母上の、そしてお父上の愛情をいっぱいに受けておるのだよ、百。今はまだあまり実感できてはおらぬかも知れぬがな』

（嵐さんが言っていたことは本当だったんだ）  
「だからね、ハク」

由杏がその表情に笑みをたたえたまま、言う。

「だから百<sup>ハク</sup>。あなたはどこにいてもかあちゃんの大切な大切な子どもなの。どこにいたってどんなにたくさんの人の中にいたって、おまえはかあちゃんにとっては特別な宝物。だから　だから、おまえはおまえの信じる道を進んで行っていいよ。側にいなかったておまえがかあちゃんの大事な子どもであるということは絶対に変わらないんだから。かあちゃんのためにおまえのやりたいことができないのなら、その方がかあちゃんにとっては悲しいことなんだよ」

「かあちゃん……」

百がじつと由杏の目を見返す。由杏は息子の視線を真正面から受け止めて、頷く。

「おまえ、やりたいことが　できたんだろう？」

黄瀬に足止めされた嵐は、薬師を手伝って由杏の看護をしていた。ついでに薬師から薬の作り方なども習っている。ぶつぶつ言いながらもなんだかんだと状況になじんでいる嵐であった。

「ああもう、せっかく雨も上がったのにのう」

まだ雲の少し残る空を見上げながら、飽きもせず嵐がぼやいた。

「仕方ありませんよ、事件の捜査に協力するのは皇国民の務めですからね」

「わしは皇国民ですらないっつーに……」

薬師がしつこくぶちぶちとぼやく嵐に、苦笑する。

「でもあなたも気になりませんか？ここで何があったのか。いやそれだけでなく　この沙漠で、吐蕃皇国で何が起こりつつあるのか」薬師がさらりと告げた言葉に、嵐はちろりと視線をやることで応える。

「　　気付いているでしょう？こここのところの沙漠の異常を。いや、吐蕃皇国全体で異変が起きつつあることを。」



乾いた土地では洪水が起こり、水の豊かな土地で大地がひび割れる。あるところでは蝗が農作物を喰い尽くし、はたまた別の土地では時ならぬ雪で農作物が凍え腐ってしまったとか。

そう、沙漠の街では蝙蝠が大発生して人間を襲う、なんてこともありましたね」

「……ふむ。そんな話も聞いたのう」

「隠す必要はありませんよ。沙漠の民の情報網は世界で一番迅速で正確です」

あくまでとぼけようとする嵐に、薬師はにっこり笑って釘を刺した。  
「沙漠の民、か。噂通り　いや、噂以上のもののようなのだのう」  
嵐はため息を吐いた。

「あの事件のとき、禾峯露の街にも何人かの沙漠の民がいたのですよ。彼らが言っていました。広範な知識と知恵のある人物が闇の生物の弱点を見抜き、事件を解決してくれたと」

「あの事件を解決したのは女戦士のはずだが」

「ええ、『沙漠の戦士』のことですね。彼女も沙漠の民の間では有名ですからね。あの後、更に名声が高まって仕事の依頼が引きも切らないそうですよ」

薬師がおかしそうに笑う。反対に嵐はがっくりと肩を落とした。

「でもね、お気を付けください、嵐さん」

薬師の言葉に真面目な調子が戻ったのを感じて、嵐が視線を上げる。

「沙漠の民には様々な事情や背景を背負った者が集まっており、大抵の世の中のこととは知ることができます。無法者も犯罪者もおりますから裏世界の知識や情報も入ってきます。

それでもさすがに外法に詳しい者はありません。

分かりますか？この吐蕃で最も不法無法、限りなく闇に近い集団である「沙漠の民」ですら、「外法」はタブーなのです。学ぶことも許されません。もっとも、学ぼうとしてもその術が<sup>すべ</sup>ないのです。外法に関わる書物や知識、道具は沙漠の民ですら入手困

難です。それほど外法とは閉ざされた、忌むべき知識なのです。

それがなぜ今、こんなにも活動が目立つようになってきたのでしょうかね？」

薬師の言葉に嵐が表情を曇らせる。

「…やはり、そうか？おぬしもそう思うか？」

「外法のことですか？」

頷く嵐に、薬師も頷き返す。

「少なくともこの沙漠周縁で知る限り二件、外法の関わった事件が起きております。これは相当異常なことです。何を狙っているのか分からないということだけでも充分すぎるほど不気味です。何かあると勘繰るのが自然でしょう」

嵐は薬師の言葉に頷きつつ黒髪の女戦士のことを思い出していた。そしてふと薬師に問いかける。

「おぬし、西方神話のことを知っておるか？」

薬師は唐突な問いにきょとんと目を見開く。

「西方神話、ですか？…ええと、確か沙漠の西の国で伝えられていた神話のことでしたか？」

「そうだ、多分それだ」

「いやあ、ちよつとわからないですねえ…そういう話があるのは確かに知っていますし、少しは聞いたことがありますよ。西の方の村に行ったこともありますし、そういうところでは呪術師から薬のことを教わりますからね。呪術師というのはそういう話にも通じているし製薬法を神話に求めることもありますから。でもそういうのはほんとうに断片ばかりですから…例えば皮膚病を治すための薬には川辺の葦の穂を使うとか。でもそれがどのどういう話なのか、そういうことは彼らも知らないことが多いですしね…」

「そう、か…いや、すまぬ。突然妙なことを訊いてしまつて」

「いえ、私こそお役に立てませんで。でもそれが外法と何か関わりがあるのですか？」

薬師の問いに嵐は分からぬ、と頭を振った。しかしその胸中に一つ

刺のように気持ちの悪さが宿ったのを感じていた。

## 6・底流

その日も吐蕃皇国政府の一日は、朝一番の皇臨席の会議、「朝議」から始まっていた。

玉座の皇の面前にずらりと並んだ文官武官それぞれから仕事の進捗状況が報告され、今後の予定が話し合われ決定されてゆく。

北の新宮殿は機材がようやく揃ったので、今日から改めて土地の測定及び土質調査が行なわれることになった。緊張した面持ちでそのことを皇に報告した文官は、意外にあっさりと皇が了承を与えたことに気を抜かれた。しかし一方、今度遅れたらその責任はどのようにとらされるものか、想像するだに恐ろしくもあった。

その恐怖からか、彼は調査が済み次第、工事人足を三割増にして工事の速度を上げることがその場で皇に告げた。皇が制止する理由はない。工事の予定が遅れているのは事実だからである。

その日はその他に来年採用の官僚及び皇立研究所職員・研究員採用試験の出願がいよいよ開始されることが報告された。

吐蕃では才能のある者には広く公平に門戸が開かれていた。この試験でも、老若男女出身地域は一切問わず、純粹に全ての試験で合格する者を採用するというになっていた。もちろん内部でそれぞれに合った仕事割り振られるわけで、必ずしもそれぞれの希望が100%叶うというわけではなかったが、それでも多少の事情は考慮されるのである。

出願締め切りは一カ月後。そして本試験は二カ月後に始まる。更に試験自体は三ヶ月かけて行なわれる。その間の受験者の生活費も、基本的には皇国が持つ。といっても宿舎は指定されているし試験の日程上、自由はほとんどないと考えてよいわけであるから、破格の待遇ということではない。ただし見事試験に合格して正式に官僚、

或いは研究員に採用されたら、その給与から少しずつ受験の間の費用が差し引かれる、というシステムになっている。

朝議の終わる頃、大都の役人から、大都内で数週間前から興行している旅芸能一座から更に数週間興行期間延長の申し出があったことが報告された。

その一座の興行は現在大都で最も評判の良いもので、連日テントに見物人が入りきらず、ときには席を奪い合って喧嘩沙汰まで起きているほどのものである。その一座には特に問題もなかったため、この申し出は簡単に受理された。

その日の朝議はそんな感じで特に波風も立たず終わり、文武官僚から下々の役人まで久し振りに和やかな表情で謁見の間を退出したという。

朝一番、開いたばかりの皇立研究所職員・研究員採用試験の出願受付所には既に長蛇の列が出来ていた。

文字通り老いも若きも人種すら様々な志願者の中で、その列の先頭にいたのは長いふわふわの髪の毛を無造作にまとめた若い女性であつた。

「明青<sup>ミンセイ</sup> 山東県<sup>シャントン</sup>出身。16歳。女。受験は初めてです！」

少女らしいやや甲高い、よく通る声ではきはきと身分を申し立てる。その勢いに受付係員の男は内心押されていた。

「……はい、明青。書類不備はなし、と。……ではこの出願受理証を。それとこれが諸注意事項、これが受験日程。内容をよく読んで受験当日に備えること。受理証は無くさぬよう、必ず当日持って来るように。これがなければ受験は許可されぬから、気を付けるように」

「はい！」

間髪入れずに返る元気が良い、というよりも威勢のよい返事に、係員は密かに苦笑した。

（初受験の１６歳の娘か。秀才自慢か或いは親の後を継ぐとかそういう類か。元気がいいのは結構だがそれでは最後までつまいよ）  
しっかりと書類を抱えて受付所を後にする小柄な後姿を見送りながら、彼は皮肉げに口許を歪める。

（…まあ、なかなか可愛らしい娘ではあったがな。まあ、わざわざ公職なんぞに就かなくともおまえさんなら生きていけるさ）  
思いながら彼は次の受験者の出願書類に目を落とした。

「…ばればれなんだよ、あのおやじ」

受付所を大分離れて列に並ぶ人間たちを遠く町の向こうに見遣りながら、明青は毒吐いた。

「女が真面目に術を勉強して何が悪いのよ。女が、子どもが自発的に術を研究しようとする事の何が変なのよ。私だってあんたと同じ人間なんだよ。やりたいことがたまたま皇立研究職員だったからって別にいいじゃない。私は私なりに本気で人生かけてるのよ。馬鹿にしてんじゃないわよ」

胸にしっかりと書類の束を抱えて足早に歩く。ぶつぶつと呟く言葉は周囲には聞こえないくらいに落としている。

淡い茶褐色のふわふわの髪が歩くたびにふわふわと揺れる。服装は男のものと同ど変わらない書生のもの。小柄な姿は人込みの中で埋没していたが、なぜだか存在感のある少女であった。色白の顔に瞳は明るい董色で、行き交う男の十人中少なくとも五人は振り返る美少女であった。しかめっ面さえしていなければ。

「覚えてなさいよ。すぐにあんたの上司になって顎で使ってやるんだから！」

明青はくると振り返り、遠く離れてもまだはつきりと見える長蛇の列に鋭い視線を飛ばした。

同じ頃、大都の諸門が開けられた。日の出から開門を待ち侘びていた旅人や商人らが、門番の検閲を受けて通つてゆく。

西門に入る列の中に馬と驢馬を一頭ずつ引いた女性がいた。

「届出はしてあるはずですが…大都内で現在興行中の芸能グループの者です。興行期間を延長することになったので物資の追加を持つて参りました」

砂避けのために白い布で頭を覆い、砂塵避けのマントを纏った、姿の良い女であつた。特に日除けのために顔の前に垂らした布の隙間から覗く白い肌と印象的な紫色の瞳の美しさに、門番の男の目はつい惹き付けられていた。

「あの……」

女の声に少々の困惑が混じる。瞳も目が醒めるように美しいが声も耳に心地良いなあ、などと一瞬惚けそうになつた門番の男たちが、列の後ろからのブーイングにはっと気を取り直して慌てて手元の書類をめくつた。

「ああ、はい、確かに。砂漠の民の旅芸能一座から申請が出ているな。芸人一人と衣装、その他小道具、食料。間違いないな」

「はい」

頷いて彼女は引いている馬と驢馬を示す。

馬は彼女が乗つて来たものらしく、鞍が置かれ、その後ろに少々の荷物が括り付けられているだけであつたが、驢馬の方はその背中に山のような荷物が器用に括り付けられていた。

「芸人とはお前のことか？」

門番のうち、若い方の男が意味ありげな視線を日除け布の間の彼女の顔に注ぎ込む。その視線は多分に無遠慮で不躰なものであつたが、彼女は平気な表情でにっこりと笑つてみせた。そのままひらりと馬の鞍に飛び乗るとばさりと日除け布を払い除けた。

「興味があるなら今夜からの興行にいらっしゃい。私は砂漠の踊り

子よ」

馬上で振り返った表情は朝日の逆光で見えはしなかったが、逆に一層その神秘性をその場の人間全員に与えていた。

その夜の旅芸能一座のショーにいつにも増して観客が押し寄せたのは予測可能なこととはいえ余談である。

結局嵐はあの後、沙南の役人の現場検証に立会い、その後も何かと意見を求められ、やっと旅立つことになったのはあの日、村長の部屋で話をしてから二週間ほど過ぎてからであった。

「…で、百よ、おぬし、本気でわしについて来る気か？」

荷作りを終えた嵐が振り返って尋ねる。その視線の先で既に旅装を調え荷物も背負った百が元氣良く頷いた。

「もちろんです、お師匠さま！」

「…その『お師匠さま』はよせ……」

「では先生！」

「それはもつとよせ……」

既に何度目か分からない会話に嵐はげんなりと息を吐いた。

「いいか、何度も言うたがもう一度言うぞ。わしは吐蕃王都で仕事がある。そのために行くのだ。遊びではないのだぞ」

「わかっています！オレ、何でもお手伝いします！」

「手伝いというてもな……」

「それにオレ、強いですよ。そんじょそこらの奴には負けないですよ。嵐さん弱いじゃないですか。オレ、ボディーガードもやりますよ。絶対役に立ちますから！」

自信のある言葉というよりも、どちらかというと必死に自分を売り込もうとする思いが隠れている言葉に、嵐はそれ以上あまり強いこ



とは言えなかった。根負けしたともいう。

「それにかあちゃんも元氣になってきたし、斤さんもいるし。だから全然心配はいらないんですよ。　　ってかあちゃんも言ってくれたし」

百の言葉に嵐がふと顔を上げた。百が母親のことに言及したのは、ここ数日で初めてのことであつた。

「それにかあちゃん、言ってくれたんです。

『やりたいことがあるのなら、やっていいのよ。行きたい所があるのなら、行ってもいいのよ。わたしのことは構わずに』

『おまえはおまえの信じる道を進んで行っていていいよ。』  
「つて」

「そうか…」

嵐は優しい表情で頷いた。百がこだわりの全くない表情で母親のことを語れるようになったことは、嵐にとっても喜ばしいことであつた。

「だから、オレ、心置きなくお師匠様について行けるんです!」

「……だから『お師匠さま』は…」

「じゃあ、先生」

「……………もうよい」

嵐は大きくため息を吐くと荷物を肩にかけて体に縛り付けた。その上から防塵ケープを羽織る。

「お師匠さま!どこに向かうんですか?」

「…沙南だ。橋もとりあえず復旧したことだしのう。当初の予定通りのルートで行くことにする」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0684e/>

---

風都紅塵戦奇譚 二．風塵の都

2010年10月18日14時10分発行